

第3章 調査の方法と成果

1. 調査区

今回の発掘調査は、熊本地震で被災した八代市役所本庁舎の建替えに伴うものであり、敷地総面積 23,795.58 m²に及ぶ。

上記敷地中央に新庁舎を建設することとなったが、2016(平成29)年7月に確認調査を実施した上で、建築面積 5,513.99 m²のうち旧庁舎と重なる部分を除くとともに、地下駐車場入口のスロープ部分となる箇所や免震設備設置等により掘削等の影響を受ける範囲を加えた 3,045 m²が発掘調査の対象となった。

当該地は、国史跡「八代城跡群 古麓城跡 麦島城跡 八代城跡」に隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地「八代城跡」であり、敷地の一部は市指定史跡「八代の藩校伝習堂及び教衛場跡」に含まれているため、事業主体者からの依頼に基づき、2016(平成28)年7月10～15日にかけて確認調査を実施したところ、旧庁舎北側において築城時の盛土層が保存されていることを確認した。

この確認調査の結果を踏まえて、事業主体者と協議を重ね、『九州地区埋蔵文化財発掘調査基準』に従い、上記 3,045 m²の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査にあたっては、調査対象地の西半を第1調査区、東半を第2調査区と設定し、旧教育委員会棟や公用車車庫等の既存建物の解体に併せて第1調査区から発掘作業を実施する予定であった。

しかし、既存建物の解体が想定よりも時間を要する見通しとなったため、調査対象地の北西部から発掘作業を実施することとなった。その後、建物の解体に併せて東側に発掘作業を進めていった。

発掘作業も終盤をむかえた頃、協定書締結時に示されていた新庁舎地下駐車場入口のスロープが当初計画の北側から東側に変更されたことが判明した。地下駐車場入口スロープの位置変更により、後述する北面石垣(SW01・同02)が現地保存されることとなったが、他方で調査対象範囲が東側に 66 m²拡張されることとなったため、あらためて9月11日に確認調査を実施した上で、拡張部分の発掘調査を実施することとなった。

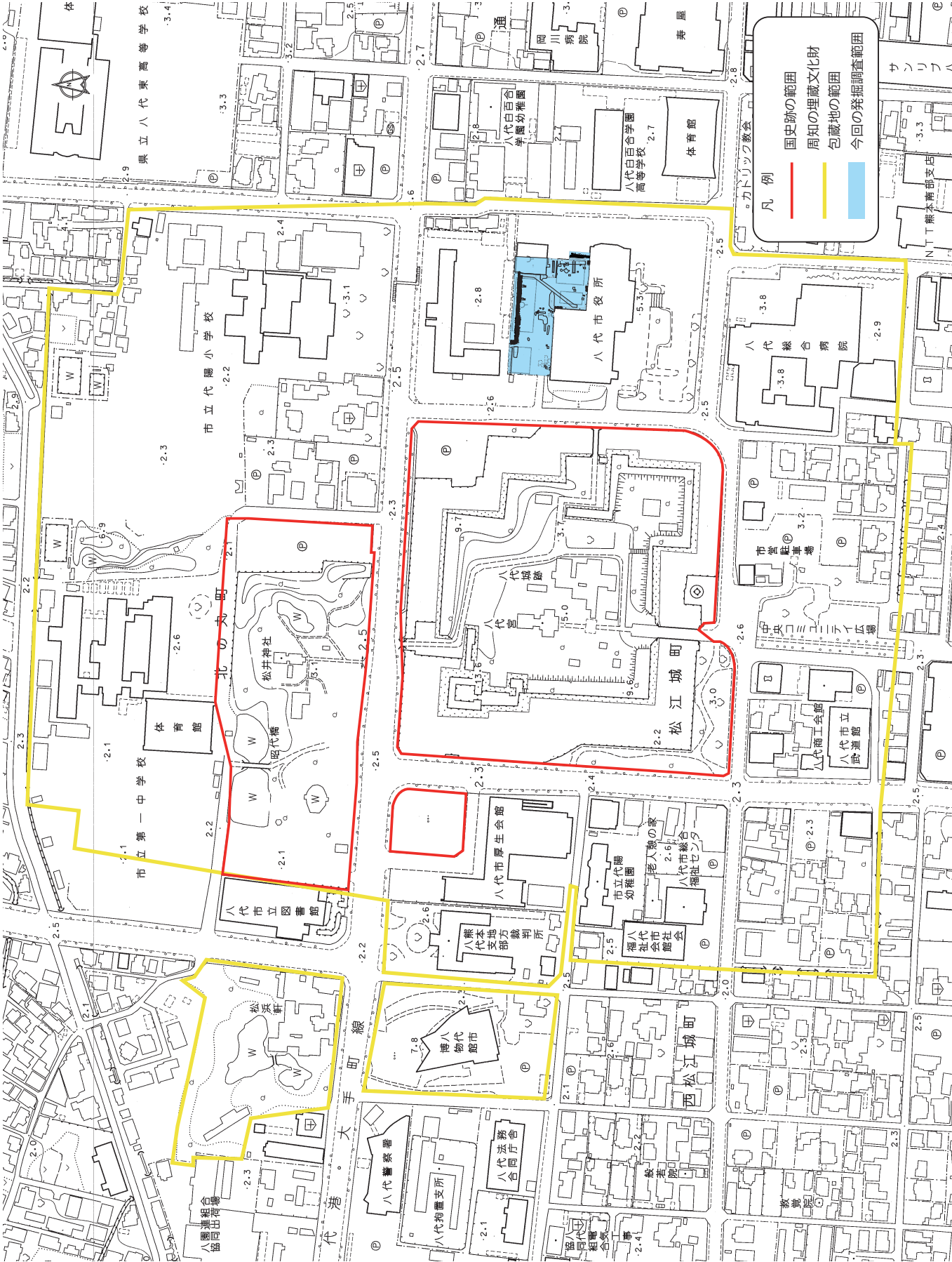


Fig.13 調査地位置図(都市計画図)



Fig.14 調査区全体図（遺構平面配置図）

2. 調査の方法

(1) 発掘調査体制と遺構の記録

今回の発掘調査は、事業主体者である八代市財務部の依頼を受けて、八代市教育委員会が実施した。八代市教育委員会は文化財保護行政を市経済文化交流部文化振興課に補助執行させているため、市文化振興課が発掘調査を担当することとなった。

市文化振興課は発掘調査の効率化・迅速化を図るため、発掘調査を民間発掘調査会社に委託することとし、市文化振興課の主任(学芸員)のうち学位を有する者を総括調査員兼監督員とし、調査の監理監督及び総括にあたらせた。

民間発掘調査会社においては、仕様書及び特記仕様書に基づき、主任調査員、調査員、実測図作成調査員、同調査補助員を選任し、市文化振興課の承認を受けて、発掘調査業務にあたった。調査に際しては、総括調査員が監理監督を行い、主任調査員と調査員が調査に関する具体的な指示を発掘作業員及び遺物整理作業員に対して行い、実施した。

発掘調査の効率化・迅速化を図るため、重機を投入して表土及び埋土の除去作業を行った。一部の旧庁舎基礎については、調査の安全性を考慮して残置のまま作業を進めた。

表土剥ぎ後、総括調査員の監理監督の下で、調査員の指示に基づいて発掘作業員が清掃作業を行い、遺構の検出にあたった。遺構の検出作業とともに、世界測地系に基づく4級基準点を設置し、5m 四方の方眼を組んで調査グリットを設定した。調査区全体の精度を1/5,000 以下に保ち、方眼の交点には原則として4.5 × 4.5 × 45cm 相当の木杭を設置し、釘で明示して基準点とした。基準点が設置できない箇所については周辺に仮杭を設置した。基準点から各グリットに北から南にアルファベットを、西から東にかけてアラビア数字を割り振り、その両軸の組み合わせでグリットの位置を表した。

検出した遺構は原則として手測りで1/20 の実測図を作成したが、石垣の解体作業に伴う図化作業等については、総括調査員の指示に基づき、写真測量を採用した。同様に、土層断面についても、手測りまたは写真測量等を活用して、1/10 ないし1/20 の実測図を作成した。

作成した遺構実測図及び土層断面実測図を解像度1,200dpi 以上のスキャナで読み込んで画像をラスター化し、調査区全体にわたって均一な精度を保った上で、Adobe Illustrator CC を用いてデジタルトレースを作成した。

併せて、1/500 の遺構平面配置図を作成した。また、石垣の解体作業に伴う図化作業では、上段から根石まで各段毎に実測図を作成した。

現地では、図化作業と併せて、調査の各段階で記録写真を撮影した。撮影機材として、総括調査員の確認を経た上で、APS サイズ一眼レフデジタルカメラ(非ミラーレス)を使用した。

撮影にあたっては三脚設置を基本としつつ、脚立上からの撮影時には手持ちで行い、光度計で計測して適性露出と適性露出±1 絞りの3 絞りで、RAW 型式で撮影した。撮影後にRAW データを Adobe Lightroom で現像して TIFF 型式に変換した。撮影したデータはRAW 及び TIFF 型式ともに2.5 インチモバイル HDD に収録した。

なお、現地における発掘作業の進展に併せて、随時航空写真撮影を実施した。航空写真については、撮影した全ての画像をデジタル化し、2.5 インチモバイル HDD に収録した。

現地における発掘調査が終了した後は、調査で発生した土砂で原況に復した。

(2) 遺物の記録

出土した遺物は、水洗・注記の後、接合及び復原作業を行った。原則として全ての出土遺物を水洗し、注記を行なった。脆弱遺物については遺物表面に直接注記せず、項目を記したラベルを添付した。

瓦類、土器類及び陶磁器類の接合には熱硬化性タイプのエポキシ系接着剤を使用し、復元にはマイクロバルーンを混ぜた石膏を用いた。ただし、土器類のうち、保存状態が悪いものについては、パラロイド B-72 を含浸させ、同 B-44 で接合した。パラロイドで接合したものについては、熱硬化性タイプのエポキシ樹脂にマイクロバルーン等の充填剤を混ぜたものを用いて復元した。

復元後に、遺物の写真撮影に影響がなくオリジナルと復原部分が区分できるよう、水溶性の塗料を用いて彩色した。

接合・復元した遺物等を対象に、手測りで原則として 1/1 の遺物実測図を作成した。遺物実測図は、遺構実測図同様に原図縮尺に対して 1/1 の精度で Adobe Illustrator CC を用いてデジタルトレースを作成した。

図化作業と併せて、遺物の正面及び側面、上面、底面、断面、主要遺物の製作痕及び圧痕、文様等、遺物に付着した塗料や炭化物等考古学的情報を有する箇所を対象に、写真を撮影した。また、出土木製品については墨書の有無を確認するため、赤外線照射機能を有するデジタルカメラで木製品の全面を撮影した。

撮影機材は発掘現場同様の機材を用いたが、室内での作業のため、光度計で計測した後ライティングを調整し、適性露出と適性露出 ± 1 絞りの 3 絞りで、RAW 型式で撮影した。撮影後に RAW データを Adobe Lightroom で現像して TIFF 型式に変換した。撮影したデータは RAW 及び TIFF 型式ともに HDD に収録した。撮影データの一部については、Adobe PhotoShop CC で調整した。

出土した木製品については、実測作業後に保存処理を実施したが、胴木等一部の木製品については事業期間内に保存処理を完了することが困難であるため、2020(令和 2)年度に国庫補助等を活用して、市教育委員会が保存処理を実施することとした。

3. 土 層

八代城跡二の丸は、八代城廃城後に八代市役所をはじめ、熊本県八代総合庁舎や八代高等学校等の公共施設、八代総合病院（現熊本総合病院）等の医療機関や民間ビル等が建設されたため、郭内の大半は石垣を含めて削平を受けるとともに、堀跡は埋め戻されている。

今回の発掘調査では、調査区内に6箇所のトレンチを設定した。このうち、2箇所のトレンチは二の丸北面石垣の構造を確認することを目的とし、残り4箇所のトレンチは二の丸の築造法等を確認することを目的として設定した。

また、二の丸北面石垣に面した堀跡の北壁土層を調査することで、二の丸石垣の埋没状況や旧庁舎等建設時の削平状況を確認することができた。

(1) 調査区北壁土層

二の丸北面石垣に面した堀跡の北壁土層は1層から4層まであり、1層は現代の整地層、2層も後世の埋設土層である。3層及び4層は一部に攪乱を含むものの、堀跡の堆積層である。

1層は整地層で、2つに分層される。1-1層は、小礫を含むにぶい黄橙色 (Hue10YR6/3) を呈する砂質土で、しまりは弱く、粘性もない。土層中にコンクリート破片が土層全体に広がるとともに、旧庁舎のコンクリート製基礎が残されており、基礎埋設時に攪乱を受けている。1-2層は褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する砂質土で、しまりあるも粘性はない。土層中に小礫〜こぶし大の礫が混じっており、旧庁舎のコンクリート製基礎設置に伴う掘り込みによる攪乱層である。

2層は廃城後、近代に行われた堀跡の埋没整地層と考えられ、2つに分層される。2-1層は褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する粘質土で、しまりあるも粘性は弱い。土層全体にマンガン粒子が含まれており、小礫が混在している。2-2層は褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する粘質土で、しまりあり。少量の小礫が含まれており、2-1層よりやや粘性を有する。

3層は二の丸北面石垣に面する堀跡の埋没土層で、2つに分層される。3-1層は褐灰色 (Hue10YR4/1) を呈する粘質土で、しまり、粘性を有する。土層全体に小礫が含まれ、褐色粘土が点在している。3-2層は、褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する粘質土で、しまりを有し、粘性は強い。土層全体に小礫〜礫が混在しており、後世の攪乱、掘り込みと考えられる。

4層は堀跡の埋没土層で、褐灰色 (Hue710R4/1) を呈する粘質土である。しまりは弱いものの、粘性は強く、土層全体に小礫が密に含まれている。3層よりもやや明るく、土層全体に褐色粘土が含まれている。

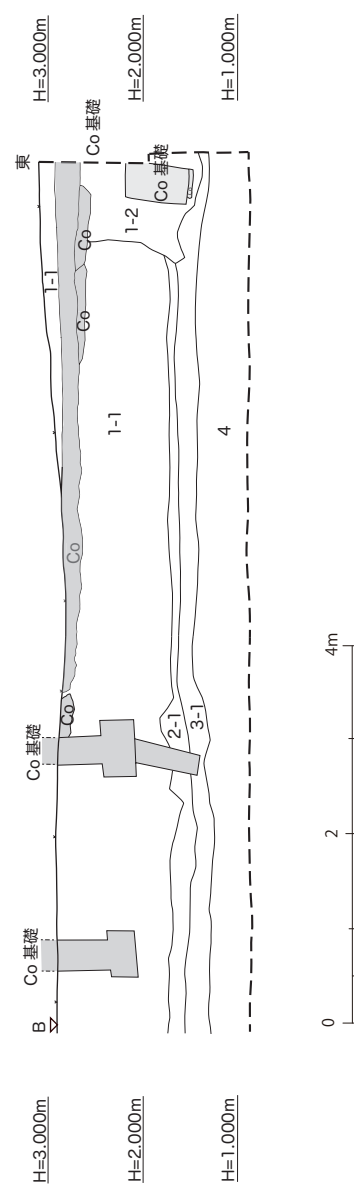
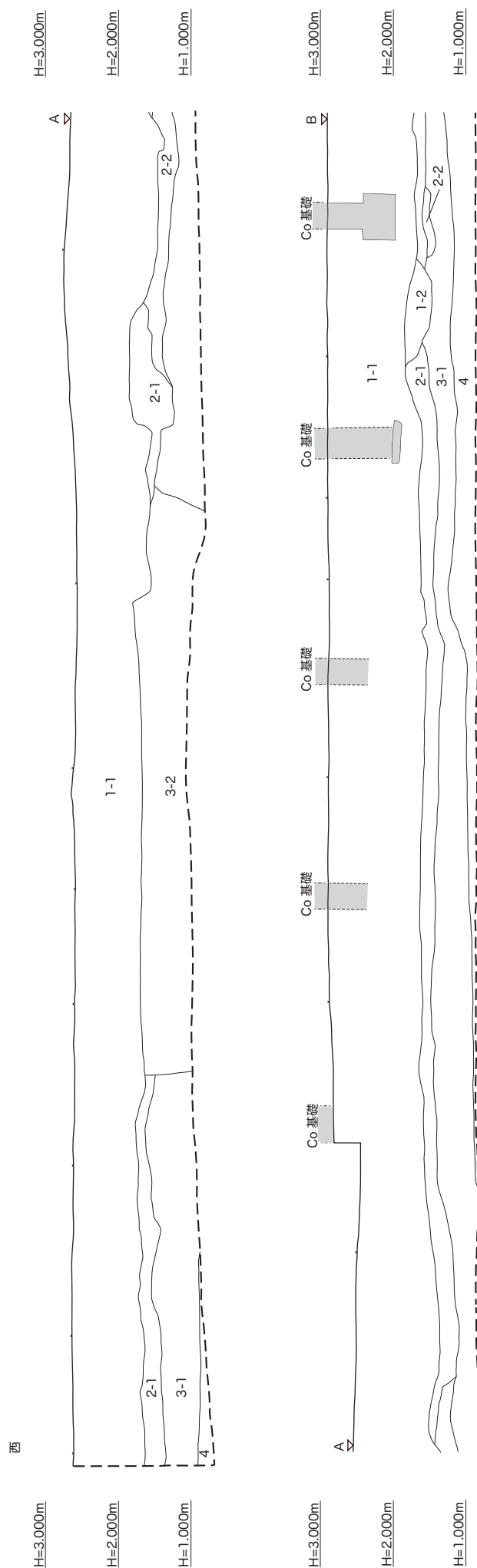


Fig.15 調査区北壁土層断面図

1-1 層	Hue10YR6/3 (にぶい黄褐色) 砂質土で、しまり弱。粘性なし。土層全体にコンクリート片が含まれる。コンクリート基礎による埋立攪乱を受ける。攪乱層
1-2 層	Hue10YR6/1 (褐灰色) 砂質土で、しまり中。粘性なし。小礫〜こぶし大の礫が混在。コンクリート基礎に伴う掘り込み。攪乱層。
2-1 層	Hue10YR6/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性弱。土層全体にマンガン粒子と小礫が混在。
2-2 層	Hue10YR6/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体に小礫少量含む。
2-1 層	Hue10YR4/7 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体に小礫含む。褐色粘土が点在する。
3-2 層	Hue10YR6/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性強い。土層全体に小礫や礫が混在。攪乱の掘り込み。
4 層	Hue710R4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり弱い。粘性強い。土層全体に褐色粘土と小礫を含む。3 層よりやや明るい。

(2) 第1号トレンチ・第2号トレンチ土層・第3号トレンチ土層

第1号トレンチと第2号トレンチは、二の丸東面石垣に直交するように設定されたトレンチである。発掘調査当初、今回の調査区内には二の丸北東隅角部を中心とする北面石垣と東面石垣が存在すると想定していた。そのため、発掘調査の進捗に併せて東面石垣の所在を確認するため、上記2つのトレンチを設けることとなった。

対して、第3号トレンチは東面石垣に平行し、第1号トレンチを内含するように設定した。第1号トレンチ及び第2号トレンチによって二の丸の東西方向の土層を確認することができたため、同じく二の丸の南北方向の土層を確認することを目的として設定した。

第1号トレンチと第2号トレンチの土層は基本的に同一である。1層から5層までが広がっているが、第2号トレンチでは4層が確認できなかった。1～5層は、いずれも八代城二の丸の築城に伴う盛土層である。

1層は、小礫～こぶし大の礫を含むにぶい黄橙色 (Hue7.5YR6/3) を呈する砂質土で、しまりが強く、粘性はない。

2層は褐灰色 (Hue7.5YR4/6) を呈する粘質土で、しまりが強く、粘性はない。土層全体にマンガン粒子が含まれている。

3層は明褐灰色 (Hue7.5YR5/6) を呈する粘質土で、しまりを有するも、粘性はない。2層と比してやや明るい色調を呈し、土層全体にマンガン粒子が転々と含まれている。トレンチ東側にて明褐灰色の砂質ブロックが混じる。

4層はにぶい褐灰色 (Hue7.5YR5/4) を呈する砂質土である。しまりを有するも、粘性はない。3層よりも明るい色調で、土層全体にマンガンのブロックが少量混在する。トレンチ東側にて明褐灰色の砂質ブロックが混じる。

5層は灰褐色 (Hue7.5YR5/2) を呈する砂質土層で、しまりを有するも、粘性は弱い。土層中にマンガンが点在するとともに、明褐灰色の砂質ブロックが密に含まれている。

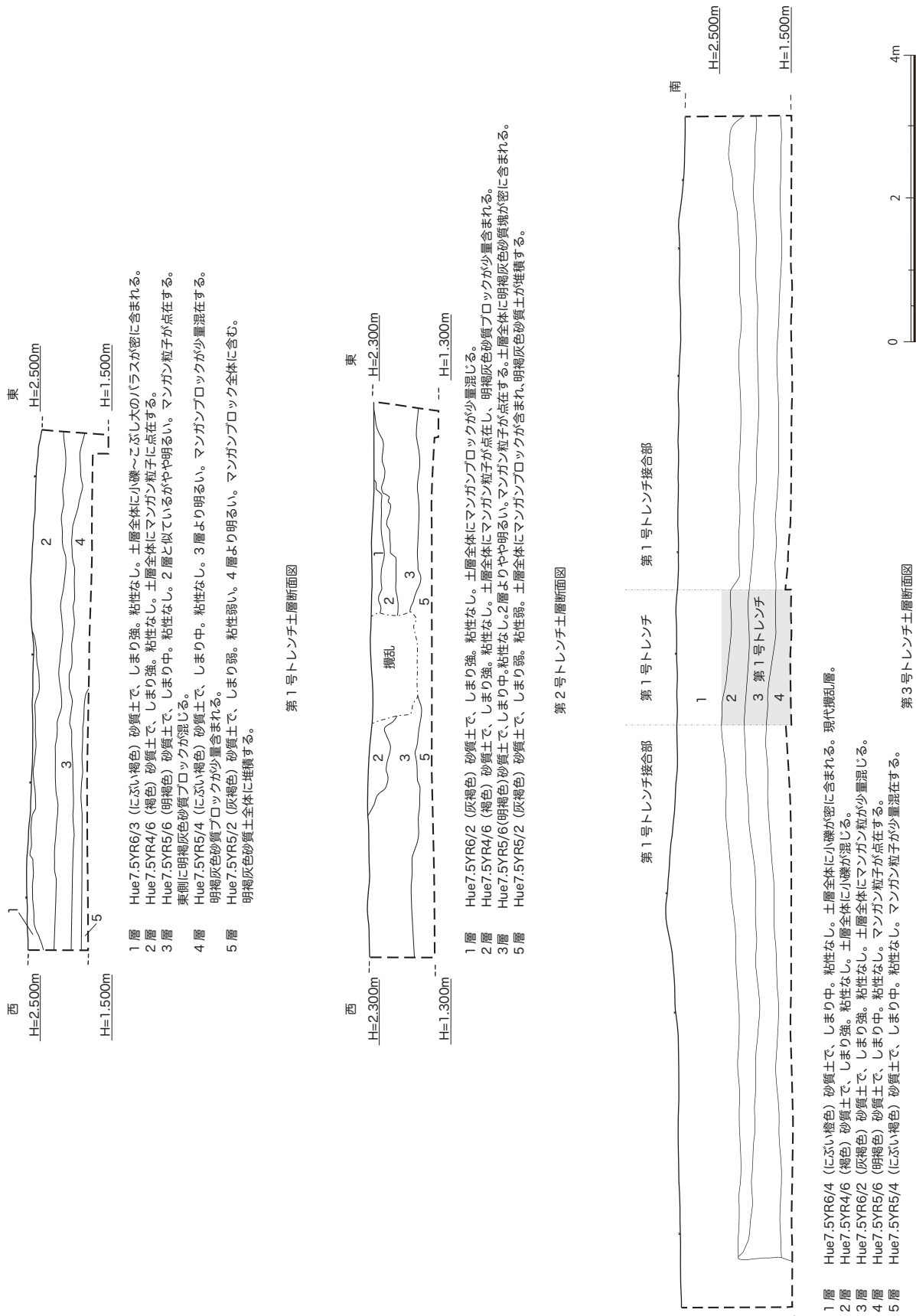


Fig.16 第1～3号トレンチ土層断面図

(3) 第4号トレンチ・第5号トレンチ・第6号トレンチ土層

第4号トレンチは、二の丸北面石垣の西端、石垣が出隅を呈して北側に屈曲する箇所の西側において、二の丸北側の土層を把握することを目的として、東西方向のトレンチを設定した。

第4号トレンチの基本土層は、1層から4層までであり、1層は旧庁舎建設時の攪乱及び整地層である。2層から4層までは、二の丸築城時の盛土層である。

1層は土層全体にコンクリート片や小礫を含み、にぶい黄橙色 (Hue10YR6/3) を呈する砂質土で、しまりは弱く、粘性はない。土層全体にマンガン粒子が沈着している。

2層は褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する粘質土で、しまりと粘性を有する。土層全体にマンガン粒子塊が混在している。

3層は褐灰色 (Hue10YR4/1) を呈する粘質土で、しまりと粘性を有する。土層全体に小礫が含まれており、褐色粘土が点在する。。

4層は褐灰色 (Hue10YR4/1) を呈する粘質土である。しまりは弱いものの、粘性は強い。3層よりもやや明るい色調で、土層全体に小礫と褐色粘土が含まれている。

第5号トレンチと第6号トレンチは、二の丸北面石垣に直交するように設定されたトレンチである。北面石垣の裏面構造を確認するため、上記2つのトレンチを設けることとなった。

第5号トレンチと第6号トレンチの土層は基本的に同一である。1層から5層までが広がっているが、第6号トレンチでは4層が3つに分層される。1層は旧庁舎建設に伴う攪乱及び整地層である。2層は北面石垣の裏込めで、3層と4層は八代城二の丸の築城に伴う盛土層であり、5層は地山部分である。

1層は明褐色 (Hue7.5YR5/8) を呈する砂質土で、しまりを有するものの、粘性はない。土層全体にコンクリート片が混在し、旧庁舎建設時の攪乱及び整地層である。

2層は褐灰色 (Hue7.5YR5/1) を呈する。北面石垣の裏込めであり、直径10～15cm程度の丸礫が充填されている。しまりは弱く、粘性を有しない砂質土が混在する。

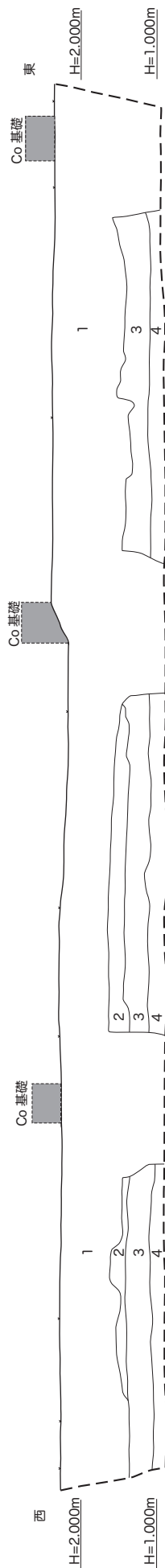
3層は明褐灰色 (Hue7.5YR5/8) を呈する粘質土で、しまりと粘性を有する。土層全体にこぶし大の礫が混在し、マンガン粒子も点在する。

4層はにぶい褐色 (Hue7.5YR5/4) を呈する粘質土である。しまりと粘性を有する。こぶし大の礫が点在する。

4a層は第6トレンチに所在する土層で、褐灰色 (Hue7.5YR5/4) を呈する混砂層粘質土である。4層に比して砂が多く含まれている。

4b層は褐灰色 (Hue7.5YR4/1) を呈する混砂粘質土層である。4a層と比して砂の混入が少ない。

5層は褐灰色 (Hue7.5YR4/1) を呈する粘質土層で、しまりは弱いものの、粘性は強い。土層全体に小礫が含まれており、湧水を伴う。築城以前の地山と考えられる土層である。



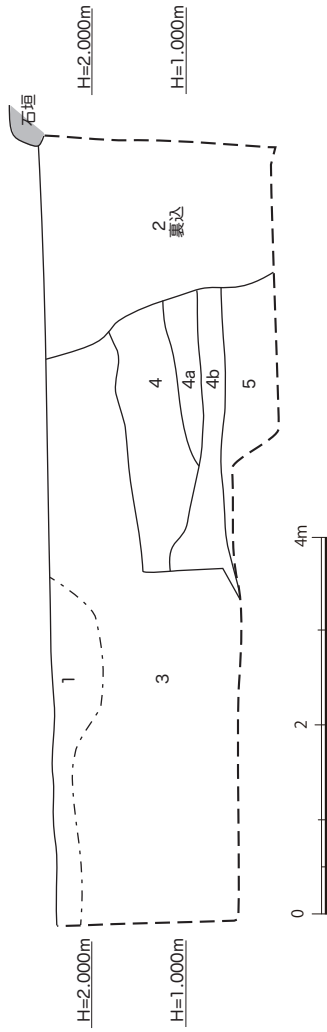
- 1 層 Hue10YR6/3 (にぶい黄褐色) 砂質土で、しまり弱。粘性なし。コンクリート片と小礫が土層全体に含まれる。土層全体にマンガン粒子が点在。コンクリート基礎等を伴う機乱受ける現代層(機乱層)。
- 2 層 Hue10YR6/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体にマンガン礫が混在する。
- 3 層 Hue10YR4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体に小礫が含まれる。褐色粘土が点在する。
- 4 層 Hue10YR4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり弱。粘性強。小礫全体を含む。3層よりやや明るい。褐色粘土が全体を含む。

第4号トレンチ土層断面図



- 1 層 Hue7.5YR5/8 (明褐色) 砂質土で、しまり中。粘性なし。マンガン粒点在。コンクリート混在。現代機乱土。
- 2 層 Hue7.5YR5/1 (褐灰色) 砂質土で、しまり弱。粘性なし。石垣の裏込め。
- 3 層 Hue7.5YR5/8 (明褐色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体にこぶし大の礫が混在する。マンガン粒も点在する。
- 4 層 Hue7.5YR5/4 (にぶい褐色) 粘質土で、しまり中。粘性中。こぶし大の礫が混在する。1層より明るい。
- 5 層 Hue7.5YR4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり弱。粘性強。土層全体に小礫が密に含まれる。湧水。

第5号トレンチ土層断面図



- 1 層 Hue7.5YR5/8 (明褐色) 砂質土で、しまり中。粘性なし。マンガン粒が点在。コンクリートが混在。機乱土。
- 2 層 Hue7.5YR5/1 (褐灰色) 砂質土で、しまり弱。粘性なし。石垣の裏込め。
- 3 層 Hue7.5YR5/8 (明褐色) 粘質土で、しまり中。粘性中。土層全体にこぶし大の礫が混在する。マンガン粒も点在する。
- 4 層 Hue7.5YR5/4 (にぶい褐色) 粘質土で、しまり中。粘性中。こぶし大の礫が混在する。
- 4a 層 Hue7.5YR5/4 (にぶい褐色) 粘質土で、しまり中。粘性中。2層より砂が多く混在する。
- 4b 層 Hue7.5YR4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり弱。粘性強。2a層より砂が所々に混在する。
- 5 層 Hue7.5YR4/1 (褐灰色) 粘質土で、しまり弱。粘性強。土層全体に小礫が密に含まれる。湧水。

第6号トレンチ土層断面図

Fig.17 第4～6号トレンチ土層断面図

4. 遺 構

今回の発掘調査で、二の丸の北面石垣及び東面石垣を検出した。ただし、旧庁舎やそれ以前の開発によって庁舎敷地内は削平を受けており、二の丸郭内に所在したであろう建物跡等の遺構は失われていた。

(1)SW01

八代城跡二の丸の北面石垣のうち、東西に延びる部分である。石垣は、国史跡に指定されている本丸及び北の丸同様に石灰岩の野面積である。一部の石材には石割時の矢跡が残されており、矢跡は平面方形を呈する。SW01 に用いられている石材は石灰岩の自然石または粗割したもので、築石面の長辺で約 0.9m 程度、短辺で 0.5m 程度、石尻方向で 0.8m 程度を測り、本丸の石垣と比して小振りである。

検出した石垣の長さは 41.1m で、石垣は南に 3 度傾斜している。石垣は、西端で入隅を呈して SW02 に接続する。石垣上面は削平を受けて失われており、堀底からの高さは最も保存状態が良い箇所では 5 段積の 1.95m、保存状態が最も悪い箇所は根石のみが残されており 0.6m を測る。

入隅部分から東に 13.35m の範囲にかけては石垣が湾曲し、ほぼ根石のみが残されているのみである。他所と比して石垣の積み方も乱雑であり、石材が縦方向に積まれている箇所もある。根石直下に割石が敷設されている箇所もあり、当該箇所は築城後に石垣の孕みや崩壊等が発生したために積み直した箇所と考えられる。

積み直したと考えられる石垣の前面には、13 本の杭木が打込まれていた。杭木の打込みに規則性を見いだすことはできないが、杭木は石垣の修復-積み直しに伴う工作物のひとつと考えることができる。

杭木は、長さ約 45 ～ 70cm、直径 5 ～ 9cm を測る。いずれも広葉樹を材料としており、樹種同定の結果、いずれも *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ属複雑管束亜属（付論参照、以下同様）である。杭木は全体的に原木を切り出して枝打ちしただけで樹皮の一部も残存しており、杭の製作は概して雑である。杭木の年輪は 9 ～ 13 本確認でき、比較的樹齢の若い樹木を用いていることが分かる。地面に打込みやすいように杭の先端は^{ちような}鉋で整形されているが、堀へ打込む際に杭木の先端部がつぶれたり折れてしまっている。堀底部分を精査したが、杭木を打込む前の根切りの痕跡等は確認できなかった。

後述する SW03 の杭木と比して杭木の整形が雑であり、樹齢も若い樹木が用いられていることから、杭木を急いで調達・製作して石垣前面に打込まなければならないような緊急の案件-石垣の積み直しが発生したことを示している。

SW01 の傾斜角度は、石垣東半部（断面 A ～ D）で 70 ～ 78 度を測り、西半部（同 E ～ I）で 66 ～ 90 度を測る。西半部は後世の積み直し部分が含まれ、SW01 と SW03 で構成される東端の出隅部分も失われているために断定しかねるものの、SW01 各所の傾斜角度の相違は、SW01 の輪取り-石垣の両端から中央部にかけて傾斜が緩やかになっていることを示していると推察される。

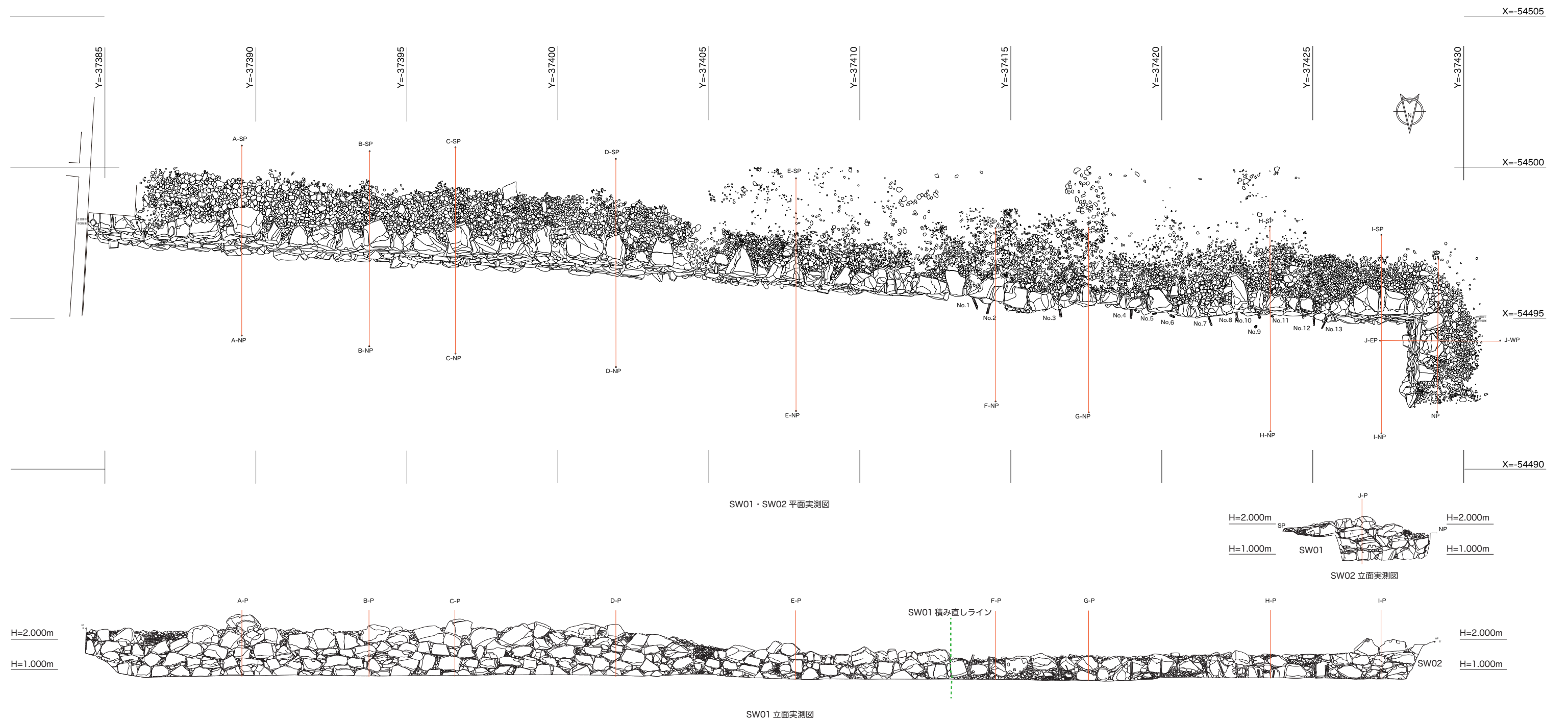


Fig.18 SW01・SW02 遺構実測図

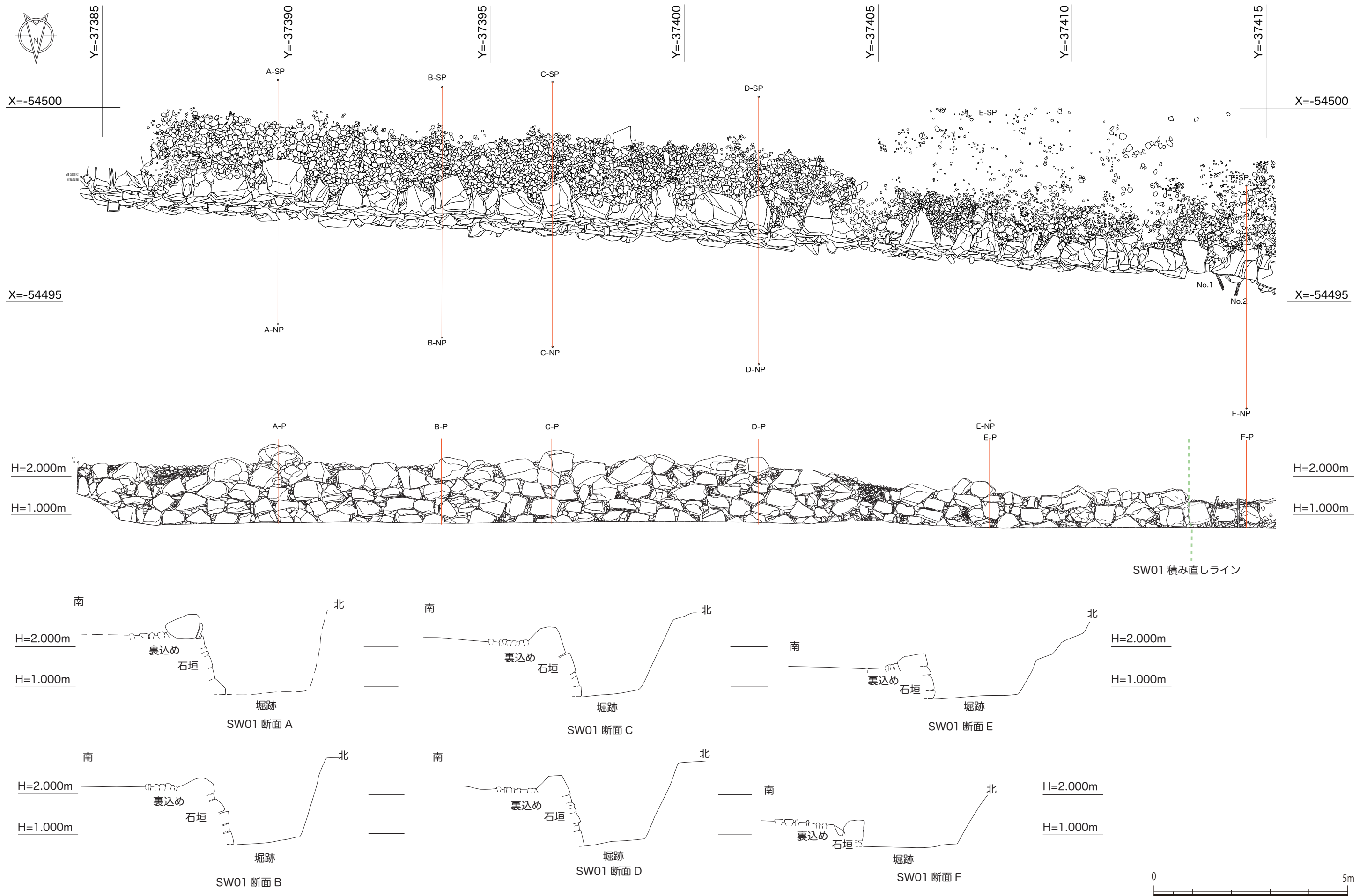


Fig.19 SW01 平面・立面実測図①

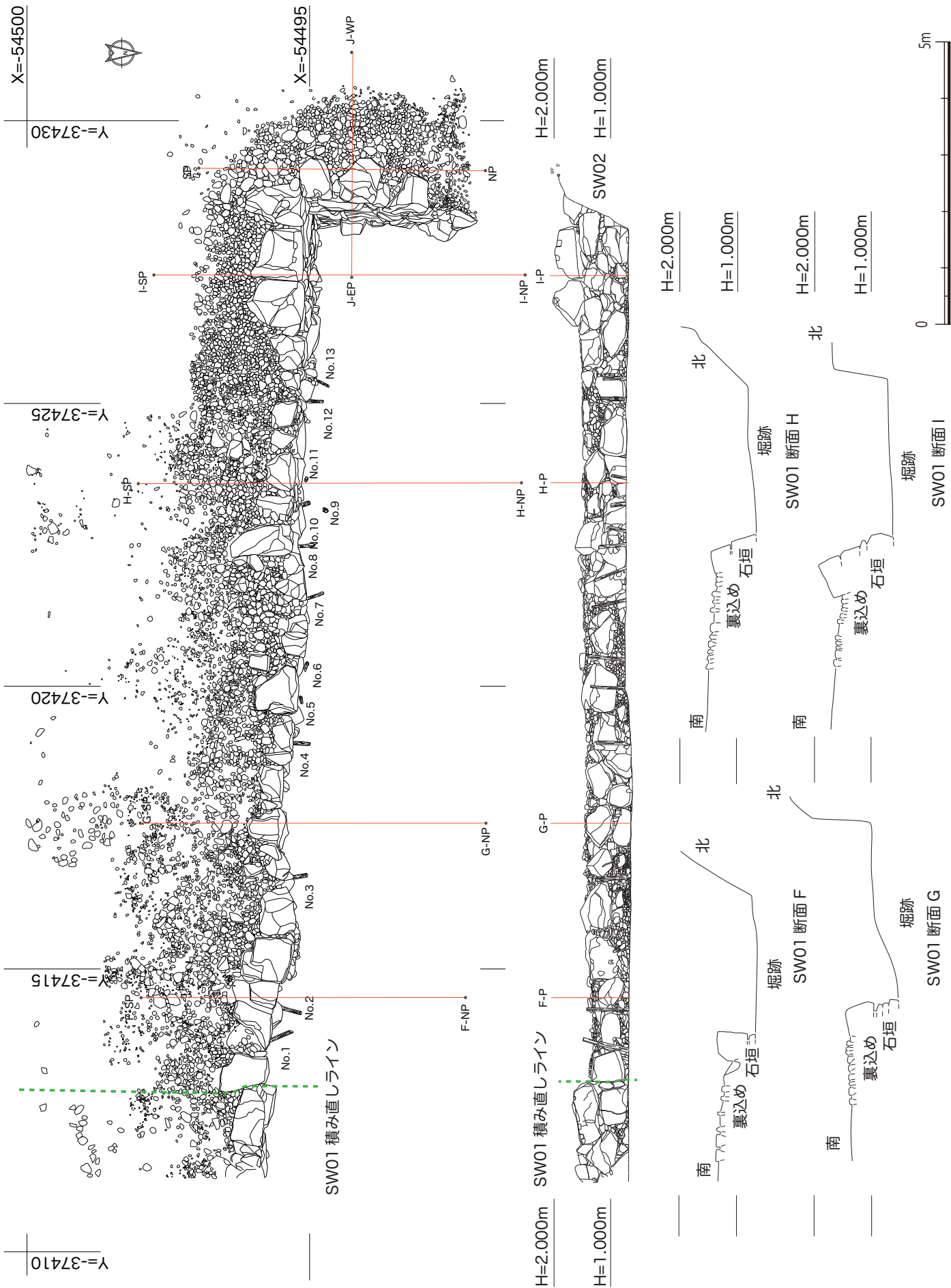


Fig.20 SW01 平面・立面実測図② (積み直し部分)

出土石垣	杭木番号	長さ	長軸	短軸	年輪数	備考
SW01	01	53.8	6.8	6.3	12	樹皮の一部が残る。
	02	64.7	9.2	7.7	13	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整。最先端折れている。
	03	79.7	10.3	7.2	11	杭先を鉋で調整。枝を折って除去している。
	04	61.1	8.0	7.1	11	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整、先端はつぶれており、枝を折って除去している。
	05	53.0	7.8	7.8	12	樹皮の一部が残る。
	06	67.8	9.2	8.8	12	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整。
	07	48.2	7.6	7.6	10	樹皮の一部が残る。先端失われている。
	08	70.2	7.1	5.2	13	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整。先端つぶれ、杭頭は失われている。
	09	32.8	5.8	5.7	11	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整。
	10	48.2	8.0	6.4	13	樹皮の一部が残る。枝打ちした箇所と、枝を折り取った箇所が残る。先端つぶれている。
	11	44.1	8.1	6.4	9	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整。枝打ち等の痕跡なし。
	12	52.6	9.0	8.0	13	樹皮の一部が残る。杭先を鉋で調整し、枝を切り落としている。
	13	47.6	12.8	6.0	10	樹皮の一部が残る。枝打ちした箇所と、枝を折り取った箇所が残る。

Table.02 SW01 出土杭木一覧

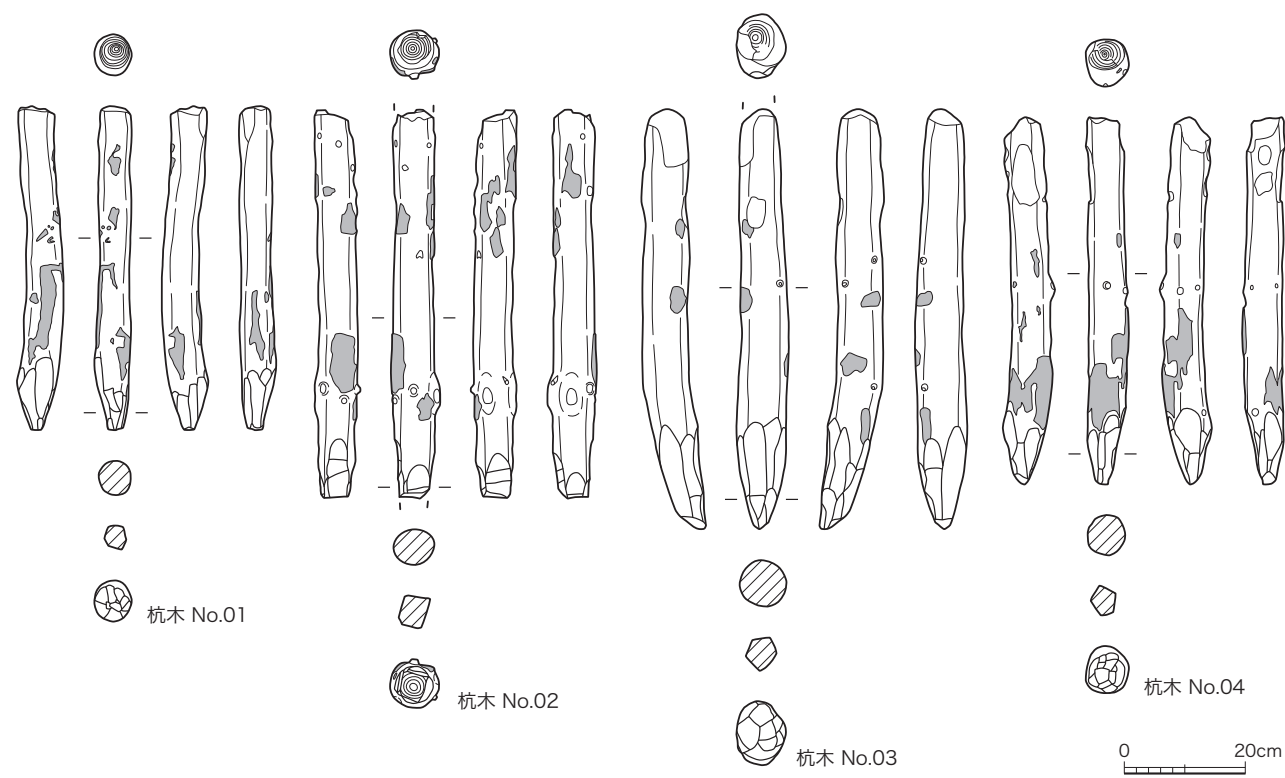


Fig.21 SW01 出土杭木実測図①

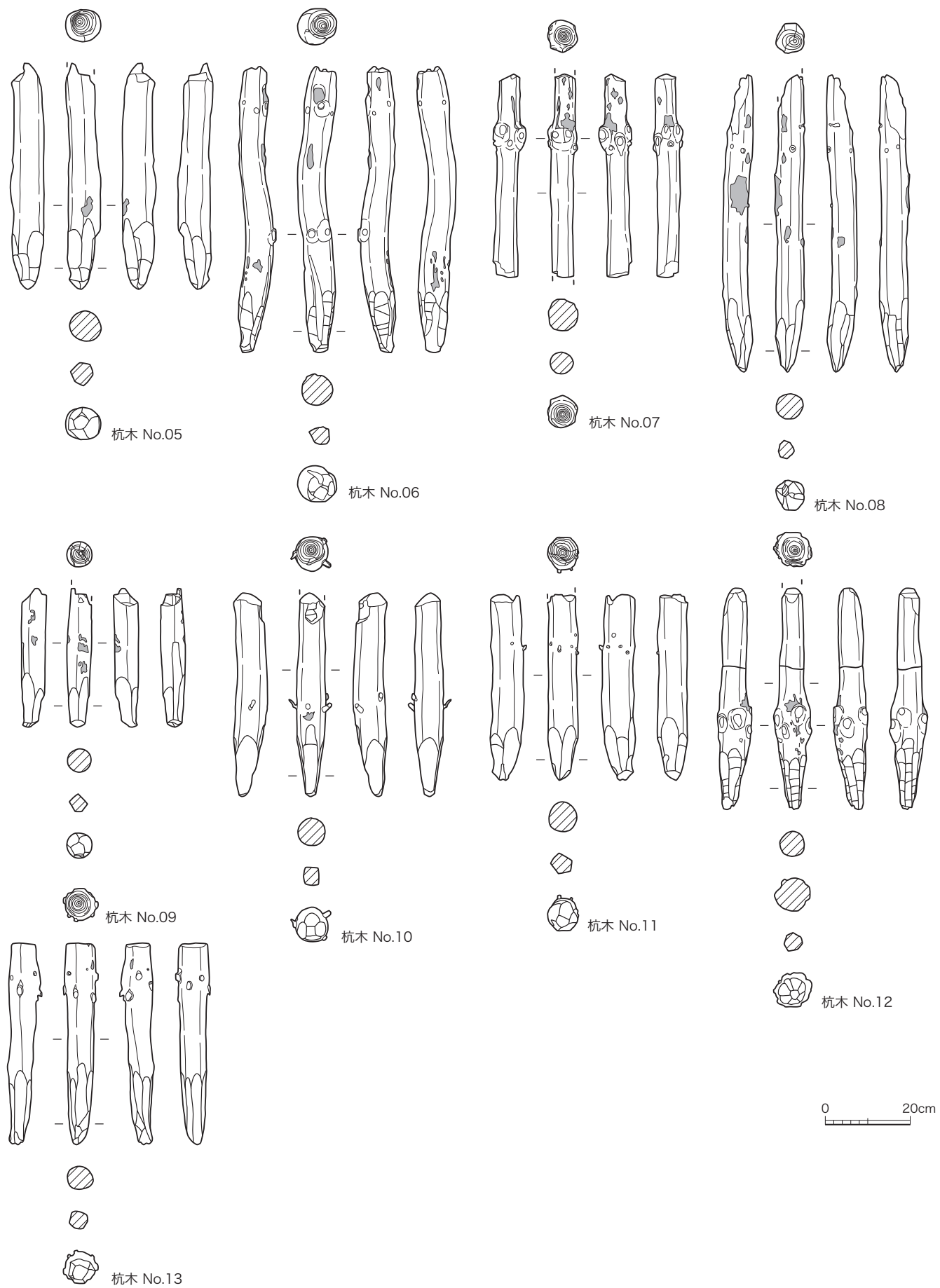


Fig.22 SW01 出土杭木実測②

(2)SW02

八代城跡二の丸の北面石垣のうち、SW01 と入隅を介して北側に延びる部分である。石垣は、SW01 同様に石灰岩の野面積みである。一部の石材には石割時の矢跡が残されており、矢跡は平面方形を呈する。SW02 に用いられている石材は石灰岩の自然石または粗割したもので、築石面の長辺で約 0.9m 程度、短辺で 0.5m 程度、石尻方向で 0.9m 程度を測り、本丸の石垣と比して小振りである。一部の石材には「☐」の刻印が 2 ヶ所確認できる。

検出した石垣の長さは 3.48m で、石垣は西に 3 度傾斜している。石垣は、南端で入隅を呈して SW01 に接続する。石垣上面は削平を受けて失われており、堀底からの高さは最も保存状態が良い箇所でも 4 段積の 1.64m の高さが残されている。SW02 の傾斜角度は、北端で 68 度を測り、SW01 の入隅部よりもやや傾斜が緩い。

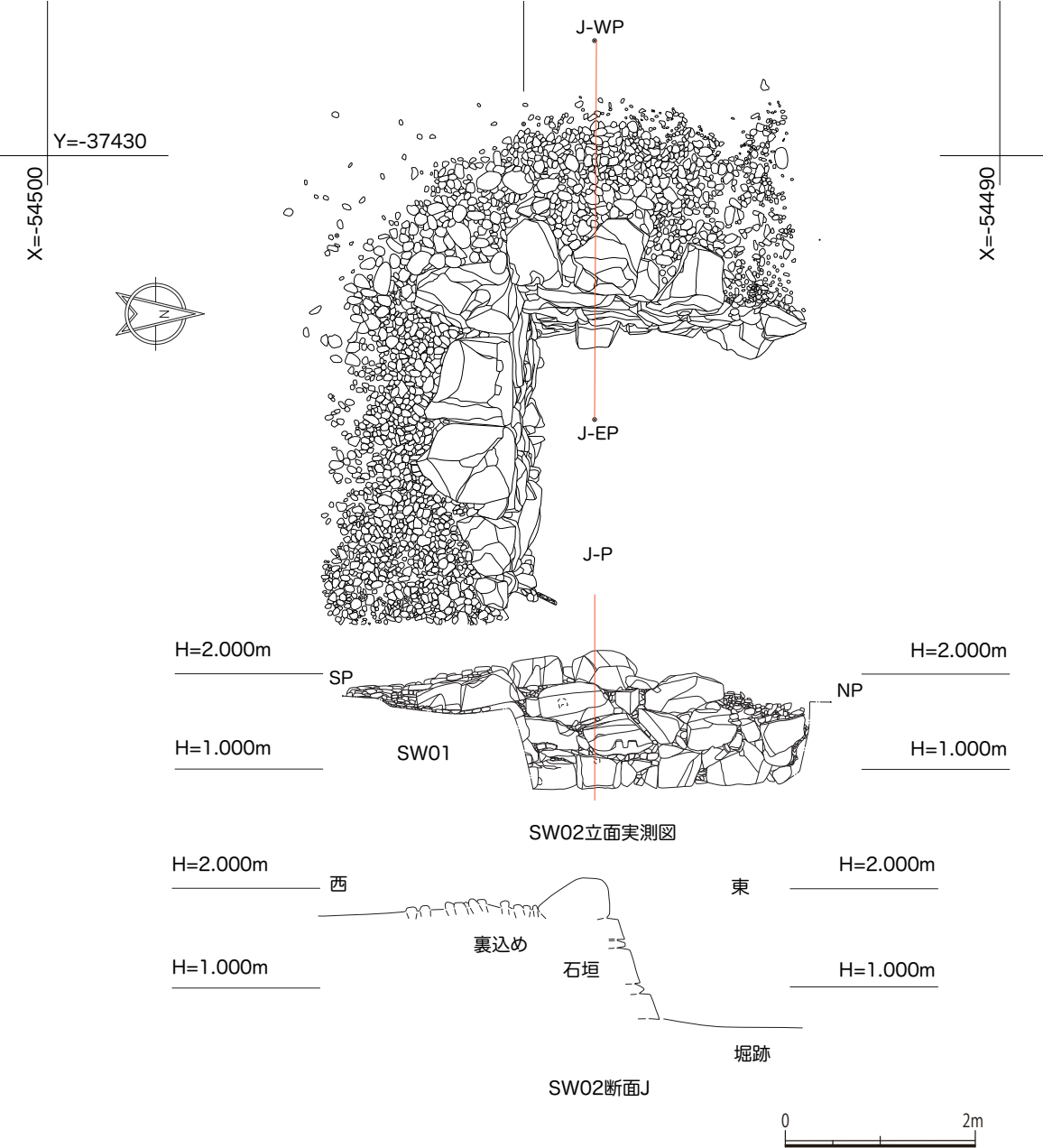


Fig.23 SW02 平面・立面実測図

(3)SW03

八代城跡二の丸の東面石垣である。石垣裏面の一部と石垣南端は旧庁舎建設時に攪乱を受けており、特に石垣南端の裏込めは失われていた。SW03は、本来その北端部でSW01と接続して隅角部を形成すると考えられる。

石垣は、SW01及びSW02同様に石灰岩の野面積である。一部の石材には石割時の矢跡が残されており、矢跡は平面方形を呈する。刻印は確認できなかった。SW03に用いられている石材は石灰岩の自然石または粗割したもので、築石面の長辺で約0.8m程度、短辺で0.6m程度、石尻方向で1.2m程度を測り、本丸の石垣と比して小振りである。

検出した石垣の長さは12.33mで、石垣は東に3.5度傾斜し、北端で出隅を呈してSW01に接続すると考えられる。石垣上面は削平を受けて失われており、堀底からの高さは最も保存状態が良い箇所ですで5段積の2.33mを測り、傾斜角度は石垣南端で86度を測る。

SW03北端から10mの範囲にかけて石垣前面に12本の杭木が打込まれていた。SW01と異なり、9本はタブノキが用いられている。また、SW03の杭木は法量や設置されている間隔に基づき、おおまかに3グループ(南からA～C)に分類できそうである。

Aグループの杭木はNo.14～16の3本で構成されており、石垣に沿って約1.2m間隔で打込まれている。Aグループに属する杭木は長さ約90～120cm、直径10cm程度の丸木を加工した部材である。いずれも枝打ち後に鉋で丁寧に調整されている。樹種同定の結果、No.14及び16は、*Pinus subgen. Diploxylon* マツ属複維管束亜属で、No.15のみ *Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc. タブノキ製である。

No.14の杭木は、釘跡が存在する。年輪は10～13本確認でき、比較的樹齢の若い樹木を用いている。地面に打込みやすいように杭の先端は鉋で整形されているが、堀へ打込む際に杭の先端部がつぶれたり折れてしまっている。堀底部分を精査したが、杭木を打込む前の根切りの痕跡等は確認できなかった。

No.16の杭木は1号胴木の直上に設置されているが胴木までは到達しておらず、1号胴木にもほぞ穴や継手仕口等は存在しないことから、杭木の設置時に胴木の存在を認識していなかったと考えられる。

Bグループの杭木はNo.17～20の4本で構成され、石垣に対して北西に傾き、約0.6～0.9m間隔で設置されている。長さ約56～86cmとA・Cグループと比して短く、No.20の杭木は先端部が折れて失われており、本来の長さは不明である。杭木は直径10cm程度の丸木を加工した部材であり、いずれも枝打ち後に鉋で丁寧に調整している。年輪は16～23本確認でき、Aグループと比してやや成長した樹木を用いている。地面に打込みやすいように杭の先端は鉋で整形されているが、堀へ打込む際に杭の先端部がつぶれたり折れてしまっている。堀底部分を精査したが、杭木を打込む前の根切りの痕跡等は確認できなかった。樹種同定の結果、いずれも *Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc. タブノキ製である。

Cグループの杭木はNo.21～26の6本で構成されており、A・Bグループと比して法量や設置間隔等に規則性を見いだすことはできない。Cグループに属する杭木は長さ約84～103cmを測り、Aグループに類似する。杭木は直径10～13cm程度の丸木を加工した部材であり、いずれも枝打ち後に鉋で丁寧に調整している。ただし、No.23と、No.24の杭木は枝打ち時に枝を引きちぎった痕跡が残されており、A・Bグループと比して整形にや

や雑な点が見受けられる。樹種同定の結果、No.21 のみ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ製で、残りはいずれも *Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc. タブノキ製である。

年輪は 13 ～ 23 本確認でき、A グループと比してやや成長した樹木を用いている。地面に打込みやすいように杭の先端は鉋で整形されているが、堀へ打込む際に杭の先端部がつぶれたり折れてしまっている。堀底部分を精査したが、杭木を打込む前の根切りの痕跡等は確認できなかった。

杭木が打込まれている範囲のうち、B 及び C グループに面する石垣の積み方は他所と比して乱雑で、築石の周囲に介石が施されている箇所もあり、C グループに面する範囲は根石が大きく張り出している。したがって、B 及び C グループが打込まれている範囲の石垣は、SW01 同様に、築城後に石垣の孕みや崩壊等が発生したために積み直した箇所と考えられ、A グループも含めて杭木は石垣の修復や崩壊防止に伴う工作物の一種と考えられる。

SW03 が検出された箇所は、新庁舎の地下駐車場入口部分に位置するため、SW01 及び SW02 のように現地保存することができず、記録保存とすることとした。そのため、SW03 上段から根石まで解体しながら記録を採ることとした。

石垣に使用されている石材は、根石から現状天端まで概して築石面の長軸よりも控えの方が長い。現状最上段(6 段目)から根石(1 段目)に至るまで、石材の法量に有意差を見いだすことはできない。

ただし、杭木の B 及び C グループに面している石垣の根石直下には 4 本の胴木(1 ～ 4 号胴木)が敷設されていた。胴木は佐賀城跡出土例(佐賀市教育委員会 2019)等のような梯状を呈しておらず、1・2 号胴木と 3 号胴木がほぼ南北に平行するように敷設されていたが、4 号胴木のみ北西から南東に向いて敷設されていた。

1 号胴木は全長約 4.35m、幅約 0.20m、高さ約 0.12m を測り、断面方形を呈する。2 号胴木は全長約 4.15m 以上、幅約 0.20m、高さ約 0.127m を測り、断面方形を呈している。胴木の中央寄りに幅約 8.0cm、長さ約 14.0cm のほぞ穴を有するが、ほぞ穴に接続する部材・部品等は今回の発掘調査では確認されておらず、2 号胴木は元来別の建造物の部材・建築部材であったと推定される。3 号胴木は全長約 2.95m 以上、幅約 0.15m、高さ約 0.136m を測り、断面方形を呈する。4 号胴木は全長約 3.50m、幅約 0.17m、高さ約 0.119m を測り、断面方形を呈する。2 号及び 3 号胴木は調査区外北側に延びており、調査の安全面を考慮して、やむを得ず各々の北端部分で切断して取り上げたため、全長は不明である。

石垣根石は、原則として 1 号及び 2 号胴木の直上に根石石材の二番を合場として据え、その石尻は 3 号胴木及び 4 号胴木に乗るように据えられていた。しかし、1 号及び 2 号胴木は根石列とずれており、特に 1 号胴木南半部上に据えられている根石はなかった。

先述した杭木の打込み状況と根石部分の孕み状況、根石が胴木上に据えられていない箇所が存在することから、SW03 は築城後に江戸時代のある時点において解体修復が行われたと推察される。熊本地震で崩壊し、保存修復を行った八代城跡本丸の廊下橋門石垣のように、水堀内での施工であったために目視で確認しながら胴木の敷設や根石の据置を行うことができなかったと考えられる。

なお、胴木 4 本については本報告執筆時点で保存処理に着手しておらず、今後樹種同定を含めて作業を実施する予定となっている。

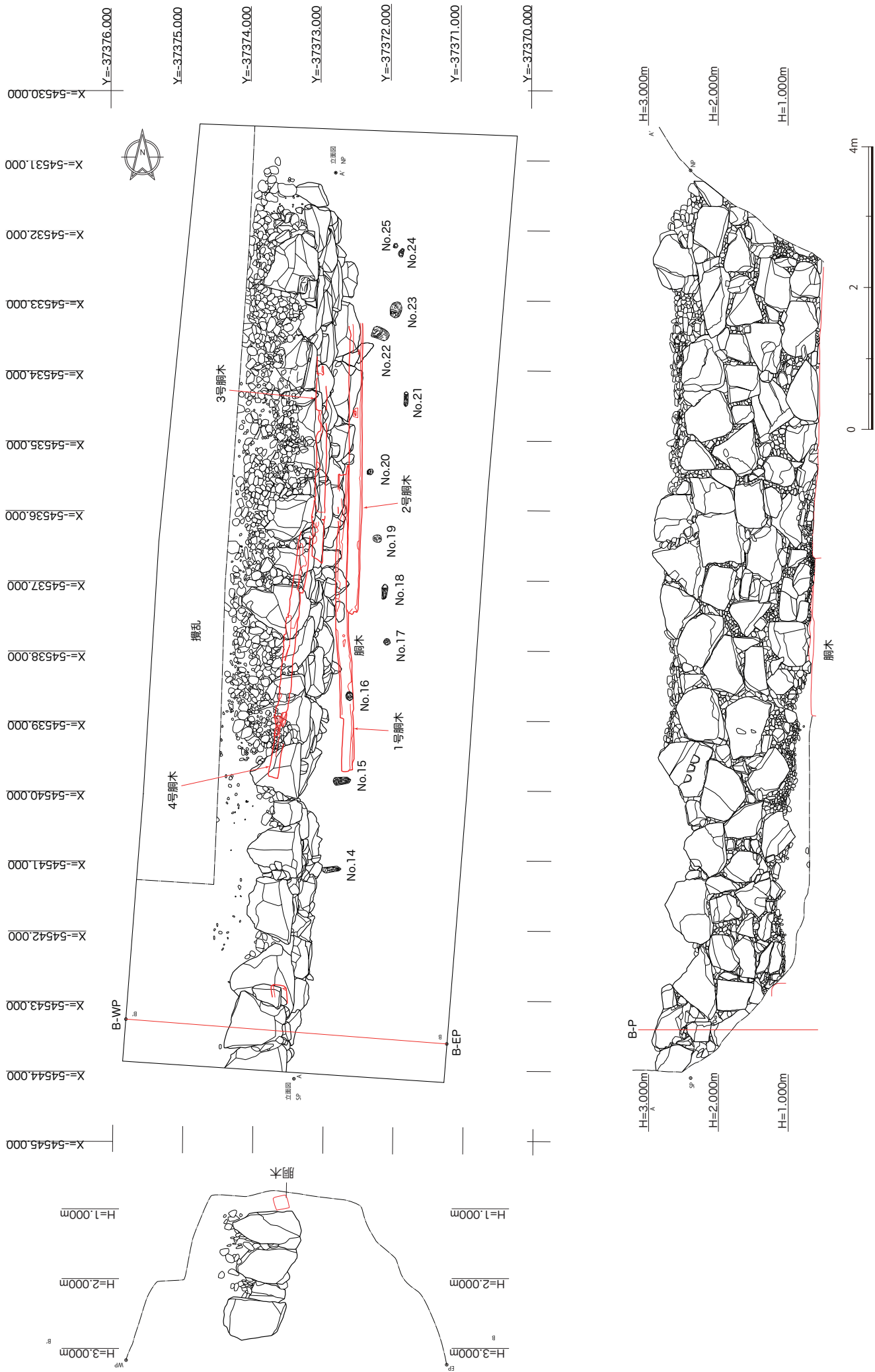


Fig.24 SW03 遺構実測図

出土石垣	杭木番号	長さ	長軸	短軸	年輪数	備考
SW03	14	120.5	13.0	10.5	14	釘跡あり、枝打ち後に鉋で掻いている。
	15	89.4	12.0	10.0	16	手斧で調整。
	16	104.0	10.8	9.3	12	枝打ち後に鉋で調整。
	17	56.5	10.0	10.0	25	枝打ち後に鉋で調整。
	18	69.5	11.2	11.0	16	枝の根元から切断し、鉋で調整。
	19	86.6	10.3	10.3	23	鉋で調整。
	20	44.0	8.0	8.0	19	杭先折れ、調整あり。
	21	83.0	6.0	6.0		枝打ち後に鉋で調整。
	22	70.0	10.1	9.7	16	枝打ち後に鉋で調整。
	23	88.5	11.0		18	鉋で調整、枝を引きちぎった痕跡あり。
	24	84.2	12.0	11.6	23	枝打ち後に引きちぎった痕跡あり。引きちぎる方向に規則性なし。
	25	99.0	13.5	13.3	13	鉋で調整、圧痕あり。
	26	103.3	9.0	9.0	13	枝打ち後に鉋で調整。

Table.03 SW03 出土杭木一覧

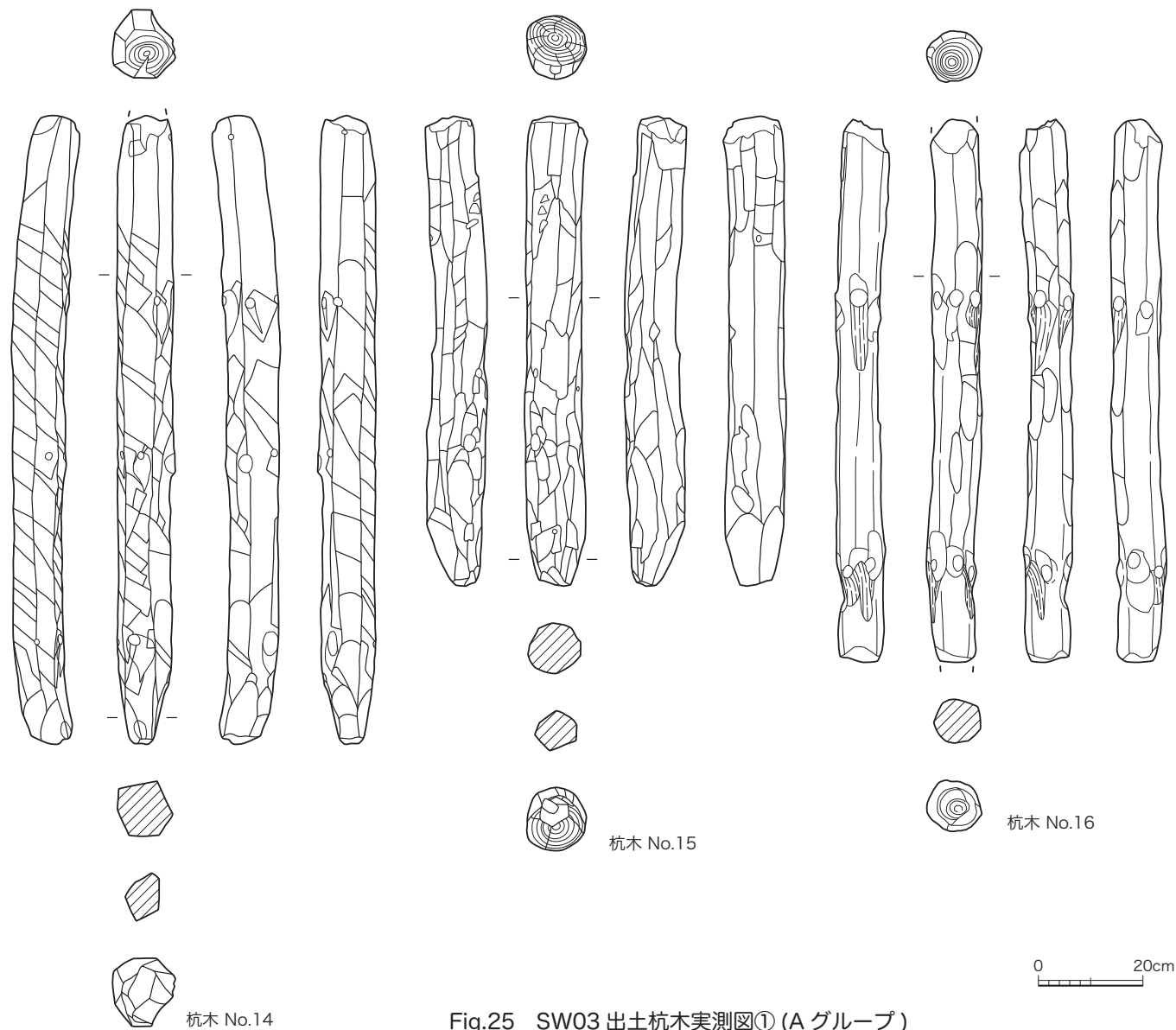


Fig.25 SW03 出土杭木実測図① (A グループ)

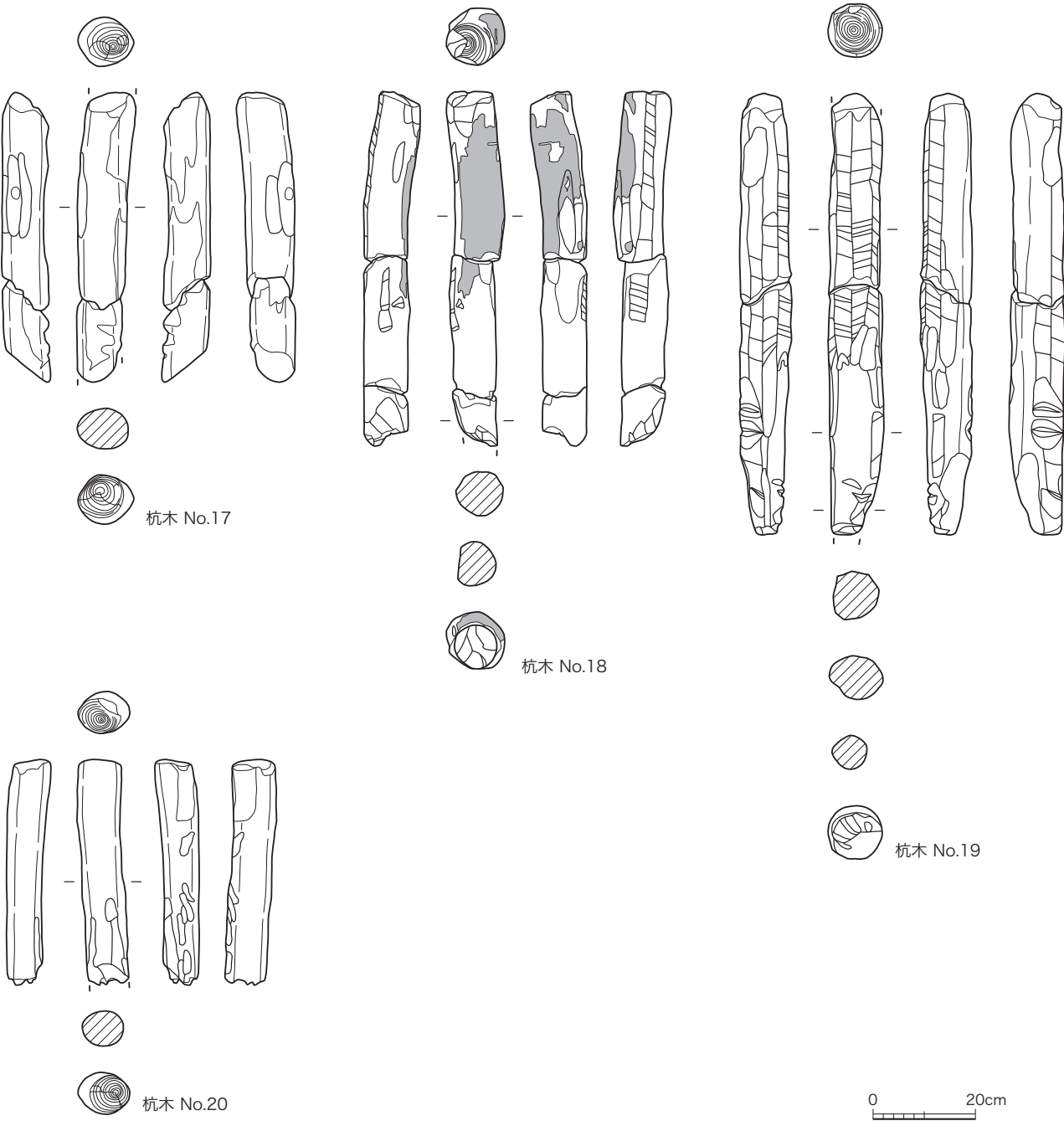


Fig.26 SW03 出土杭木実測図② (B グループ)

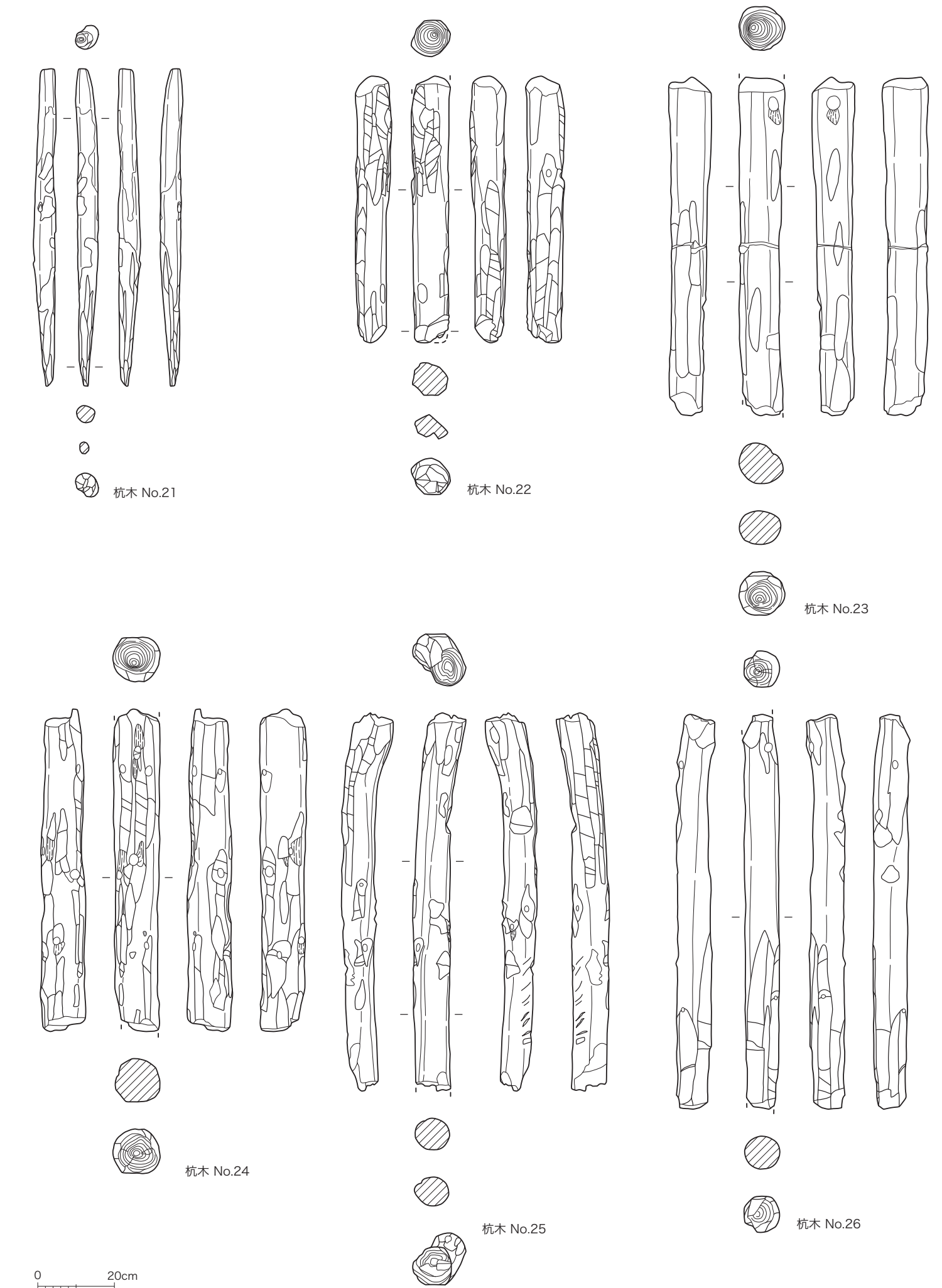


Fig.27 SW03 出土杭木実測図③ (C グループ)

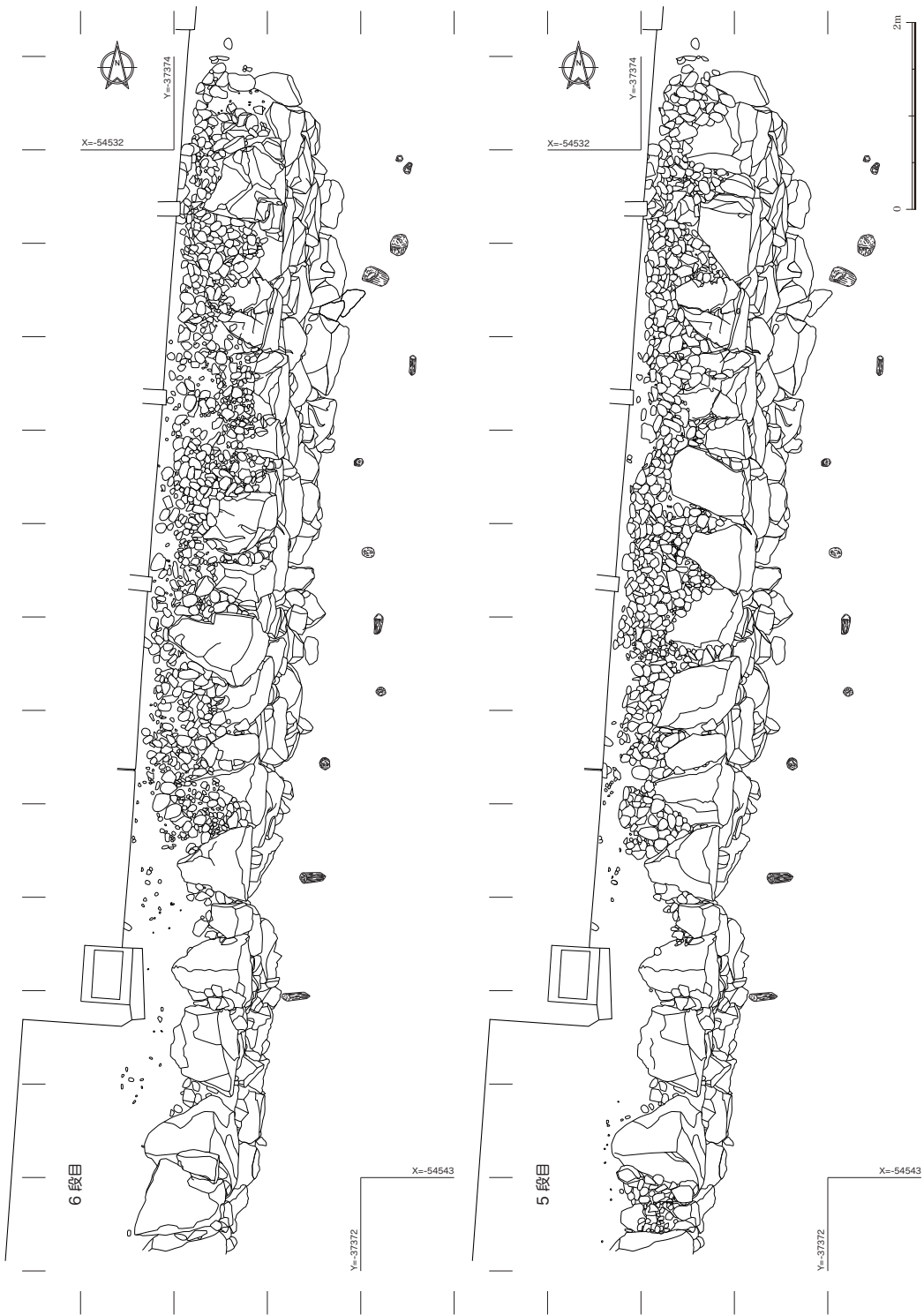


Fig.28 SW03 解体実測図①



Fig.29 SW03 解体実測図②



Fig.30 SW03 解体実測図③

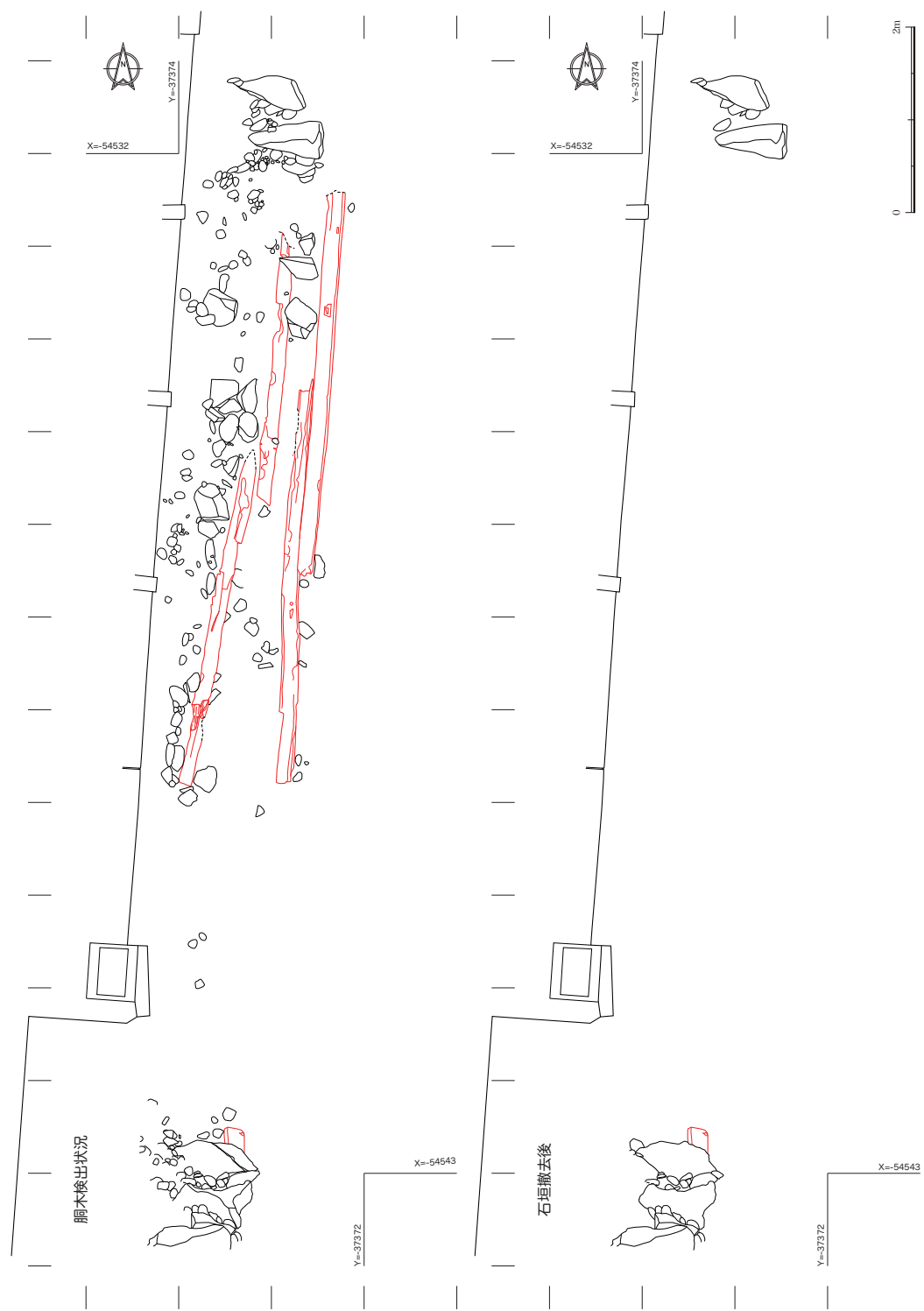


Fig.31 SW03 解体実測図④

5. 遺物

(1) 木製品

01 連^{れんし}歯下駄

SW01 前面堀跡の第3層から出土した下駄で、歯と台が一木から作られている連歯下駄である。長さ 21.5cm、幅 7.6cm、高さ 2.3cm を測る。3箇所³の穿孔が認められる。

02 連^{れんし}歯下駄

SW01 前面堀跡の第3層から出土した連歯下駄である。長さ 21.7cm、幅 10.1cm、厚み 2.6cm を測る。

03 連^{れんし}歯下駄

SW01 前面堀跡の第3層から出土した連歯下駄である。長さ 14.4cm、幅 11.8cm、厚み 2.7cm を測る。一部に調整痕が認められる。

04 差^{さし}歯下駄

SW01 前面堀跡の第4層から出土した下駄で、台に別の木材で作られた歯を差し込んで作った差歯下駄である。長さ 14.5cm、幅 8.2cm、厚み 2.8cm を測る。全体に破損が著しく、一部に使用時に継続して受けた圧力のため内側に傾いている箇所が認められる。

05 鍋蓋

SW01 前面堀跡の第3層から出土した鍋蓋である。長さ 20.8cm、幅 16.5cm、厚み 1.6cm を測る。楔のようなものが認められる。加工痕あり、丸く調整している。

06 蓋

SW01 前面堀跡の第4層から出土したほぼ正円の蓋である。長さ 14.2cm、幅 11.1cm、厚み 1.0cm を測る。一部に調整痕が認められる。

07 独^こ楽^ま未成品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した木製品で、独楽の未製品と考えられる。長さ 4.8cm、幅 5.0cm、高さ 3.9cm を測る。年輪の中心を使用している。芯持ち。上面に縞状の線刻が認められる。

08 推定木製通貨鑄型

SW01 前面堀跡の第4層から出土した木製品であり、長さ 6.6cm、幅 5.0cm、厚み 0.8cm を測る。大観通寶と考えられる焼印がみられ、通貨の鑄型とも考えられる。端部中央に1箇所¹の穿孔が認められる。

09 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 30.4cm、幅 4.7cm、厚み 0.8cm を測る。

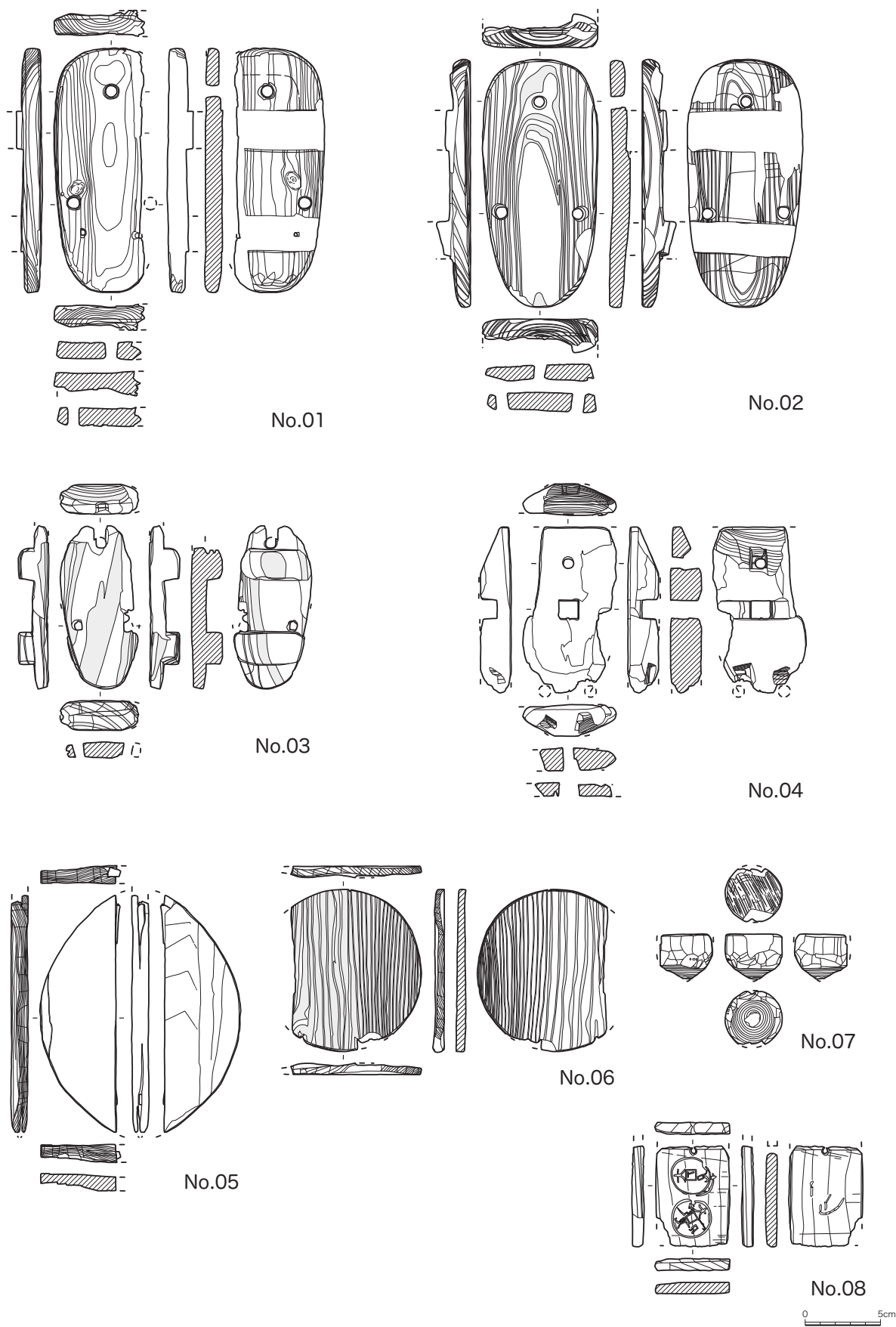


Fig.32 木製品実測図①

10 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した用途不明の木製品である。長さ 29.0cm、幅 3.9cm、厚み 0.8cm を測る。両端から約 1cm のところに 2 箇所、孔が認められる。

11 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 21.3cm、幅 4.4cm、厚み 0.7cm を測る。穿孔 1 箇所及び圧痕が認められる。

12 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 14.7cm、幅 5.8cm、厚み 3.8cm を測る。加工痕が認められる。

13 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 17.5cm、幅 5.3cm、厚み 1.1cm を測る。長径 3.1cm、短径 1.6cm を測る穴 1 箇所が認められる。

14 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 26.4cm、幅 10.2cm、厚み 1.4cm を測る。側面に直径 0.5cm の木釘が 7 箇所認められる。

15 不明木製品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した不明木製品である。長さ 29.3cm、幅 12.3cm、厚み 1.0cm を測る。被熱で一部炭化している

16 不明木製品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した不明木製品である。長さ 20.2cm、幅 6.8cm、厚み 1.4cm を測る。横軸全体に一箇所の加工痕が認められる。

17 不明木製品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した不明木製品である。長さ 13.5cm、幅 5.6cm、厚み 1.3cm を測る。側面に調整がみられる。緻密な柃目が顕著に認められる。

18 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ 27.8cm、幅 3.6cm、厚み 1.2cm を測る。

19 不明木製品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した不明木製品である。長さ 12.8cm、幅 4.3cm、厚み 0.9cm を測る。

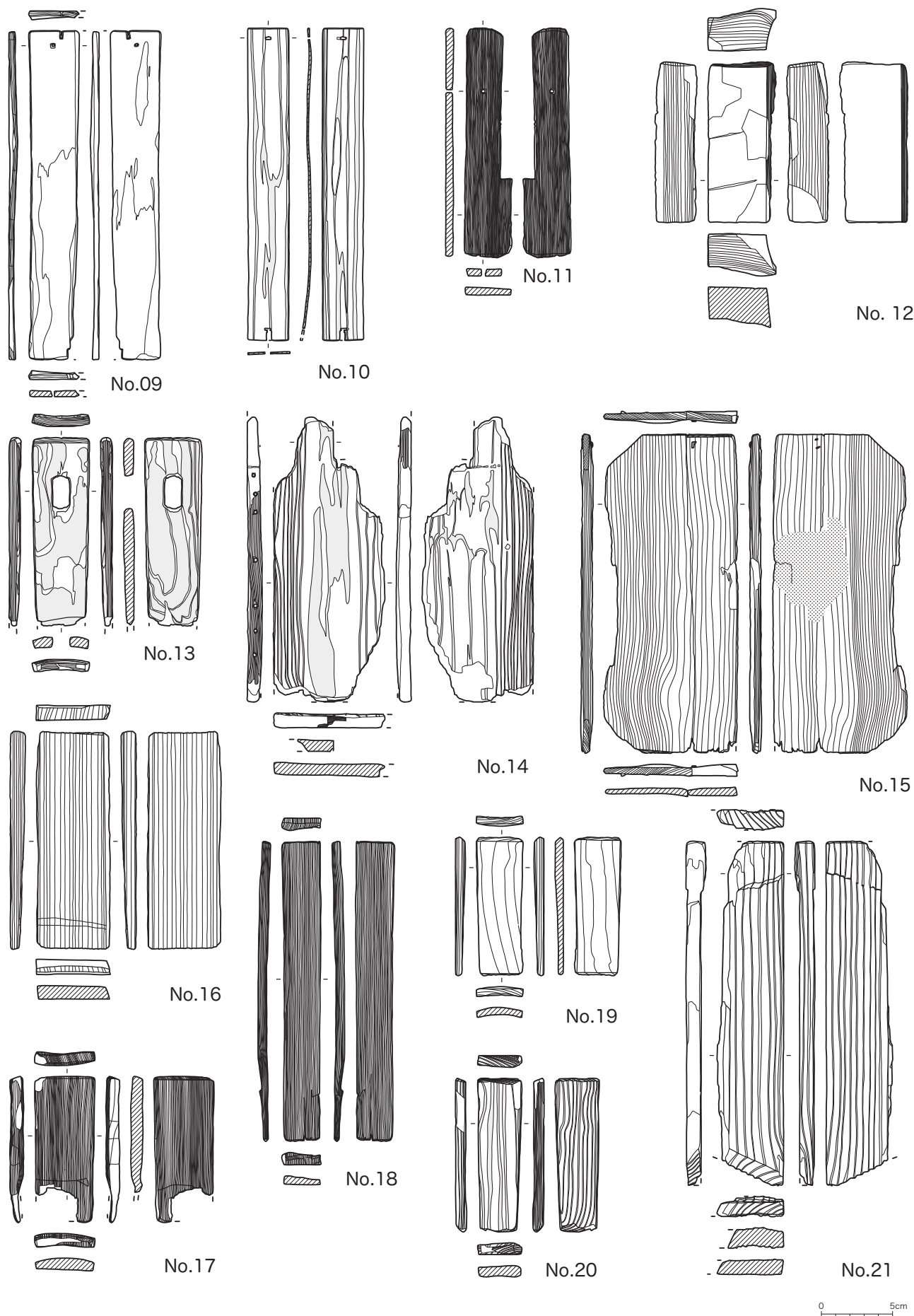


Fig.33 木製品実測図②

20 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品で、長さ14.2cm、幅4.1cm、厚み1.2cmを測る。

21 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品で、長さ31.8cm、幅6.2cm、厚み2.6cmを測る。

22 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ13.3cm、幅6.1cm、厚み2.6cmを測る。

23 不明木製品

SW01 前面堀跡の第3層から出土した不明木製品である。長さ17.3cm、幅3.2cm、厚み2.4cmを測る。一部に加工痕が認められる。

24 不明木製品

SW01 前面堀跡の第4層から出土した不明木製品である。長さ12.8cm、幅4.3cm、厚み0.9cmを測る。

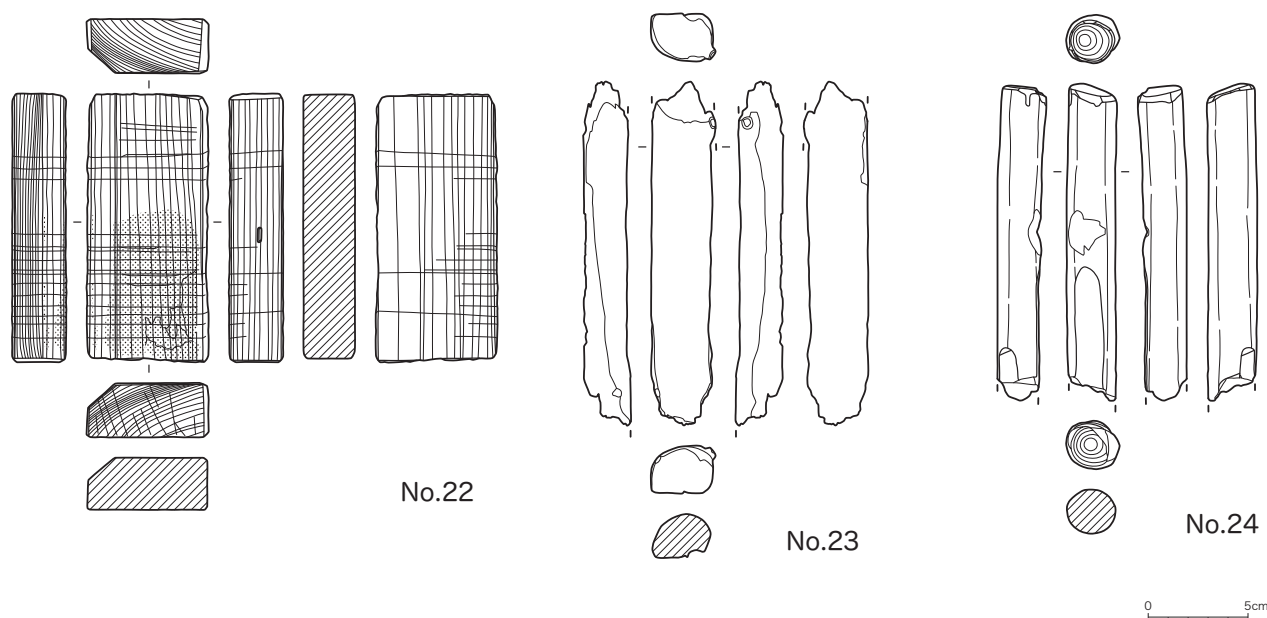


Fig.34 木製品実測図③

(2) 陶磁器類

25 瓦器 火鉢

SW01 前面堀跡 (B-10 グリッド) の第3層から出土した瓦器の火鉢である。残存高 9.4cm、底径 23.8cm を測る。内外面ともにナデ調整が認められる。色調は灰色 (5Y4/1) を呈する。

26 瓦器 羽釜

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した瓦器の羽釜である。残存高 6.1cm、復元口径 24.2cm を測る。内外面ともにナデ調整、内面に刷毛目が認められる。色調は外面が灰色 (N5/)、内面が暗灰色 (N3/) を呈する。

27 磁器 徳利

I-12 グリッドの第4層から出土した磁器の徳利である。残存高は 11.2cm を測る。内面上部及び外面は施釉され、明オリーブ灰色 (2.5 G Y 7/1) を呈する。内面底部は無釉である。

28 磁器 仏飯器

SW01 前面堀跡の第4層から出土した磁器の仏飯器である。器高 5.8cm、復元口径 8.1cm、底径 4.2cm を測る。高台は削り出しである。色調は灰白色 (10YR8/1)、胎土は灰白色 (N8/) を呈する。仏飯器は 1600 年代後半に陶器製から磁器製へ移行し、1700 年代には陶器製も残るものの、磁器が主流となっていく。

29 磁器 碗

SW01(A-5 グリッド) の第3層から出土した磁器の碗である。口縁部から体部にかけての資料で、残存高 4.7cm、復元口径 11.6cm を測る。内面及び外面は施釉され、灰色 (10 Y 7/1) を呈する。口唇部の釉はやや厚めである。焼成は良好である。

30 陶器 碗

I-11 グリッドの第3層から出土した陶器の碗である。口縁部から体部の資料で残存高 7.3cm、口径 10.8cm を測る。内面及び外面は施釉され、灰オリーブ色 (5Y5/2) を呈する。

31 陶器 鉢

I-12 グリッドの第3層から出土した陶器の鉢である。口縁部から体部の資料で、残存高 9.2cm、口径 20.3cm を測る。内外面ともに施釉され、外面は黒褐色 (10YR3/1)、内面は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。内面には砂目積、高台には削り出しが認められる。

32 陶器 瓶

SW01(A-5 グリッド) の第3層から出土した陶器の瓶である。残存高 9.2cm、底径 4.8cm を測る。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/3)、胎土は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。焼成は良好である。

33 陶器 碗

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した陶器の碗である。底部から体部の資料で、残存高 1.7cm、底径 4.6cm を測る。内面は施釉され、灰白色 (2.5Y8/1) を呈する。胎土は灰白色 (10YR8/2) で非常に硬質。削り出し高台で、見込み部分には蛇の目釉剥ぎがみられる。

34 陶器 トチン

I-12 グリッドの第3層から出土した陶器のトチンである。残存高 5.0cm を測る。外面に指押さえの痕が認められる。色調は暗褐色 (10YR3/3) を呈する。焼成は良好である。

35 土師器 燈明皿

A-5 グリッドの第3層から出土した土師器の燈明皿である。口縁部から底部の資料。器高 2.2cm、底径 5.6cm、復元口径 11.8cm を測る。内外面とも回転ナデにより調整されており、ススの付着が認められる。体部はやや内湾して開き、口縁部に至る。底部切り離しは糸切り。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈する。焼成は良好である。

36 土師器 皿

SW01(A-4 グリッド) の第4層から出土した土師器の皿である。残存高 1.8cm、底径 6.0cm、復元口径 8.4cm を測る。内外面とも回転ナデにより調整されている。底部切り離しは糸切りで行われており、体部は直線的に開いて口縁部に至る。胎土には長石、石英、雲母を含む。色調は橙色 (5YR7/6) を呈する。焼成は良好である。

37 土師器 皿

I-12 グリッドの第4層から出土した土師器の皿である。残存高 2.1cm、底径 6.8cm、復元口径 9.8cm を測る。内外面とも回転ナデにより調整されている。底部切り離しは糸切りで行われており、体部はやや外反しながら開いて口縁部に至る。胎土には長石、石英、雲母を含む。色調はにぶい橙色 (5YR7/4) を呈する。焼成は良好である。

38 染付 皿

SW01(A-4 グリッド) の第3層から出土した染付の皿である。底部から体部にかけての資料で、残存高 2.0cm、復元底径 7.6cm を測る。見込みにはコンニャク印五弁花紋がある。高台外面に二重圈線、高台脇に一重圈線を引く。釉薬は高台内を含め、内面から外面まで施釉し、畳付は釉剥ぎされている。色調は灰色 (2.5GY8/1) を呈する。コンニャク印判五弁花紋は 17 世紀の末頃に始まり、1810 年代頃まで流行したものである。

39 染付 皿

I-12 グリッドの第3層から出土した染付の皿である。口縁部から底部の資料。器高 3.1cm、復元口径 12.2cm、復元底径 6.7cm を測る。見込みにはコンニャク印判五弁花紋が見られる。高台外面に一重圈線、高台脇に二重圈線を引く。畳付は釉剥ぎが認められる。内面及び外面は施釉され、灰色 (2.5GY8/1) を呈する。器形のひづみが著しい。焼成は良好である。

40 青磁 碗

SW01 前面堀跡 (B-10 グリッド) の第4層から出土した青磁の碗である。底部から体部にかけての資料で、残存高 4.5cm、復元底径 5.4cm を測る。内面及び外面は施釉され、オリーブ灰色 (10 Y 6/2) を呈する。内外面ともにへう描きによる刻花が認められる。焼成は良好である。

41 陶器 碗

SW01 前面堀跡 (B-10 グリッド) の第4層から出土した陶器の碗である。残存高 4.2cm、底径 4.8cm を測る。内面は施釉され、オリーブ灰色 (5GY6/1) を呈する。高台は削り出しが認められる。

42 陶器 鉢

A-12 グリッドの第3層から出土した陶器の鉢である。ほぼ完形の資料で、残存高 4.3cm、底径 4.1cm、口径 13.0cm を測る。内面は施釉され、オリーブ灰色 (5GY6/1) を呈する。内面には砂目積、高台には削り出しが認められる。

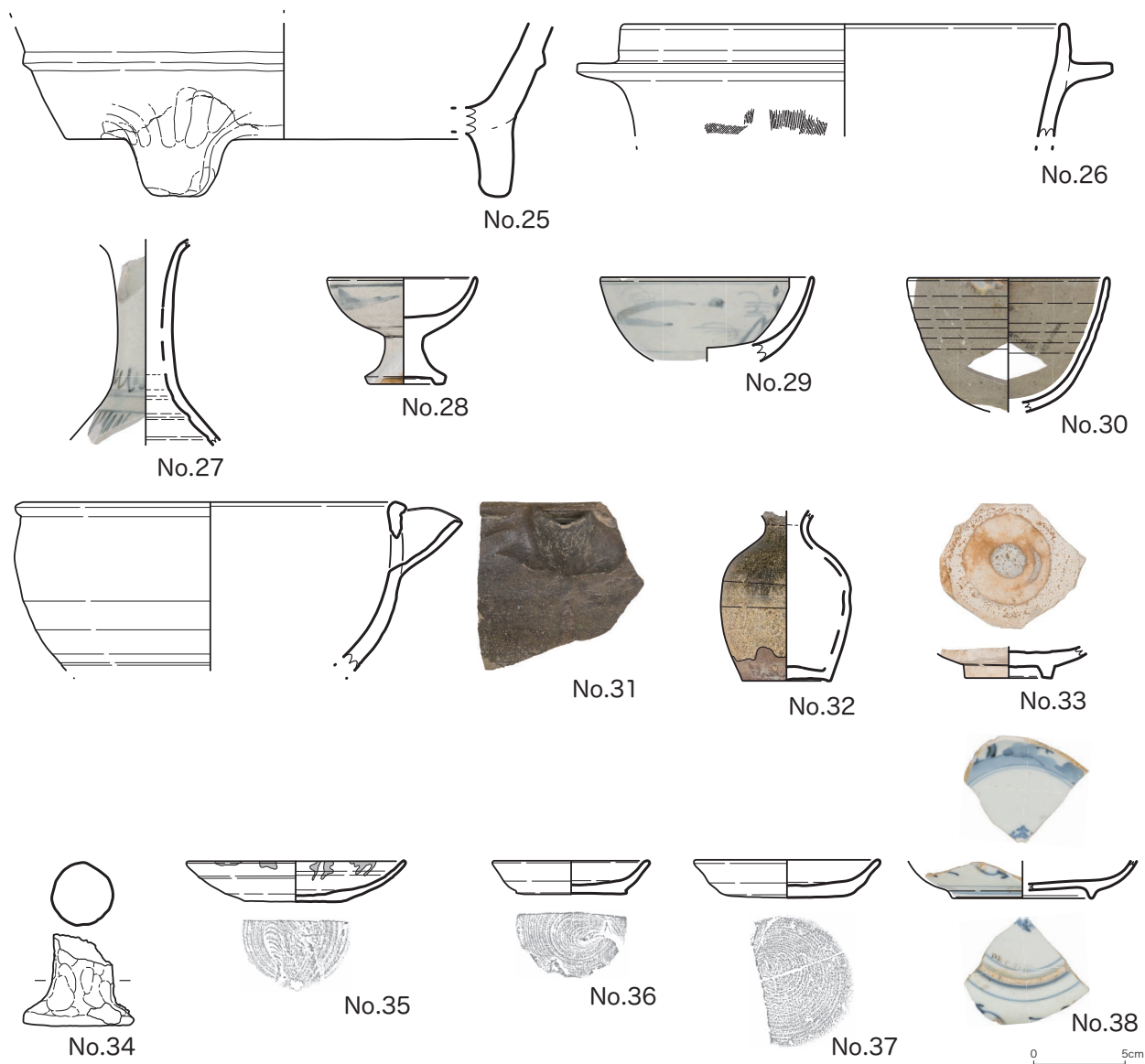


Fig.35 陶磁器類実測図①

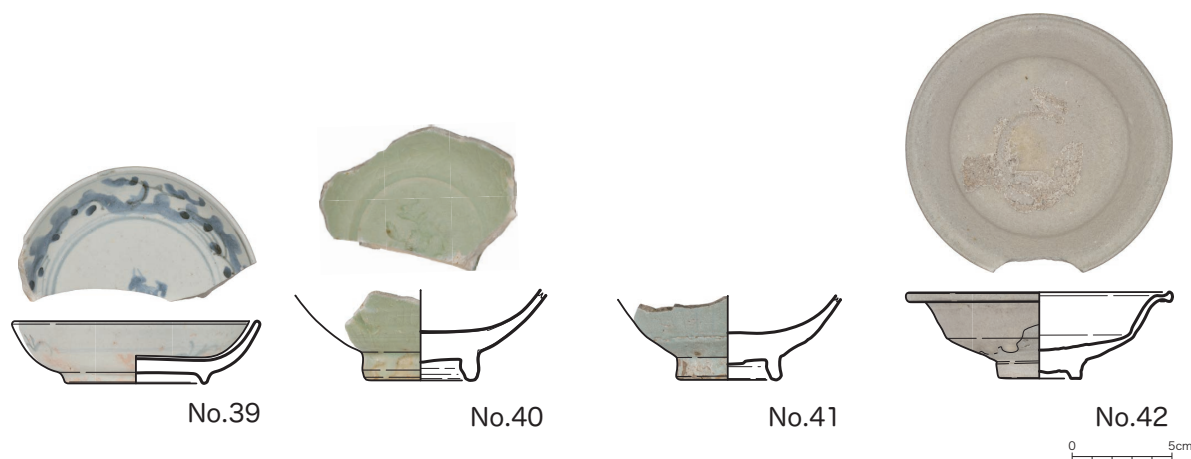


Fig.36 陶磁器類実測図②

(3) 瓦類

43 丸瓦

SW01(A-4 グリッド)の第3層から出土した丸瓦である。最大長 29.9cm、最大幅 14.3cm、胴部長 26.9cm、胴部径 14.2cm、玉縁長 3.0cm、玉縁径 10.0cm、最大厚 2.0cm、谷部 4.8cm を測る。胴部凹面にコビキB類と布目痕、ゴザ状圧痕が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後ナデ調整を施す。胴部凸面はへら状工具による整形痕と、布によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が灰色 (N5/)、凸部が暗灰色 (N3/) を呈する。

44 丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した丸瓦である。残存最大長 29.6cm、残存最大幅 12.4cm、残存胴部長 28.9cm、残存胴部径 15.4cm、残存玉縁長 0.7cm、残存最大厚 2.3cm を測る。胴部凹面にコビキA類と吊り紐痕、布目痕、わずかにゴザ状圧痕が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面はへら状工具による整形痕と、布によるナデ調整が認められる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は凹部、凸部ともに暗灰色 (N3/) を呈する。

45 丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第3層から出土した丸瓦である。残存最大長 15.9cm、残存最大幅 16.7cm、残存胴部長 11.9cm、残存胴部径 16.4cm、残存玉縁長 4.5cm、残存玉縁径 12.9cm、最大厚 2.6cm、谷部 6.1cm を測る。胴部凹面にコビキB類と布目痕、棒状工具及び板状工具によるナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具及び布によるナデ調整が認められる。また刻印(菱形)がみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

46 丸瓦

SW01 前面堀跡の第4層から出土した丸瓦である。残存最大長 21.6cm、残存最大幅 6.7cm、残存胴部長 18.8cm、胴部径 15.2cm、玉縁長 2.8cm、残存玉縁径 5.1cm、最大厚 2.0cm を測る。胴部凹面にコビキB類とゴザ状圧痕、板状工具によるナデ調整が認め

られ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具と布によるナデ調整が認められる。また胴部凸面に「八代源衛門」の刻印があり、胎土は精良、焼成は良好で、凹部は灰色 (N6/)、凸部は灰色 (N5/) を呈する。

47 丸瓦

SW01 前面堀跡の第3層から出土した丸瓦である。最大長 33.0cm、最大幅 17.3cm、胴部長 28.5cm、胴部径 17.2cm、玉縁長 4.5cm、残存玉縁径 10.5cm、最大厚 2.7cm、谷部 5.5cm を測る。胴部凹面にコビキB類と布目痕、櫛状工具によるナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具によるナデ調整が認められる。また刻印(格子形)がみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに暗灰色 (N3/) を呈する。

48 丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第4層から出土した丸瓦である。最大長 31.8cm、最大幅 15.9cm、胴部長 27.4cm、胴部径 15.4cm、玉縁長 4.4cm、残存玉縁径 11.2cm、最大厚 2.5cm、谷部 5.2cm を測る。胴部凹面にコビキB類と吊り紐痕、ゴザ状圧痕、布状圧痕が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具によるナデ調整が認められる。また刻印(珠文)がみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

49 丸瓦

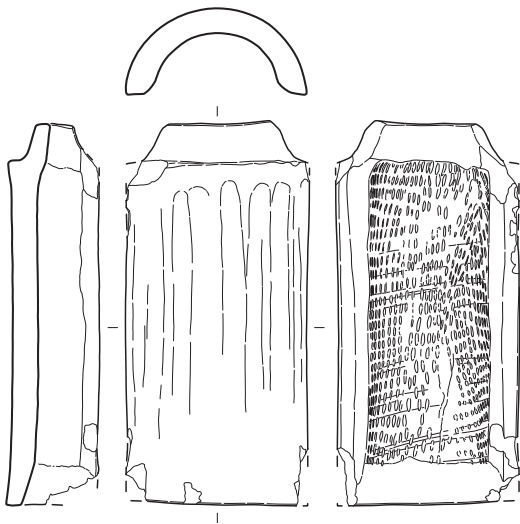
SW01 前面堀跡 (A-12 グリッド) の第3層から出土した丸瓦である。最大長 35.0cm、最大幅 17.1cm、胴部長 29.7cm、胴部径 17.0cm、玉縁長 5.3cm、玉縁径 12.6cm、最大厚 2.6cm、谷部 5.8cm を測る。胴部凹面にコビキA類と布によるナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は布及び板状工具によるナデ調整が認められる。また胴部中央からやや玉縁寄りに直径 1.3cm の釘穴を穿孔している。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が灰色 (5Y8/1)、凸部が灰色 (N4/) を呈する。

50 丸瓦

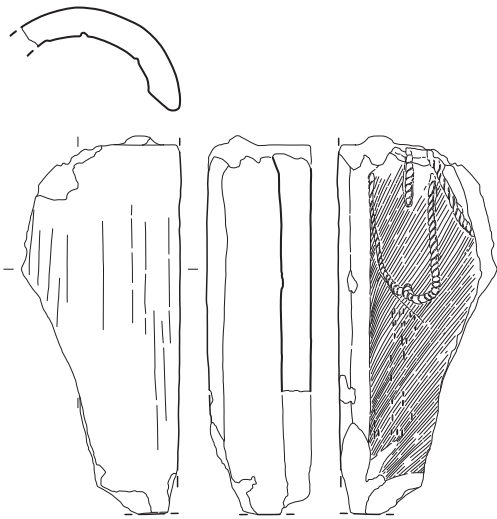
SW01 前面堀跡の第3層から出土した丸瓦である。残存最大長 28.4cm、残存最大幅 15.3cm、残存胴部長 24.7cm、残存胴部径 15.0cm、玉縁長 3.7cm、残存玉縁径 12.0cm、最大厚 1.9cm、谷部 5.7cm を測る。胴部凹面にコビキB類とゴザ状圧痕、吊紐痕、指押えが認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は布及び櫛状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が灰色 (N4/)、凸部が暗灰色 (N3/) を呈する。胴部凸面に T 字様の刻印を有する。

51 丸瓦

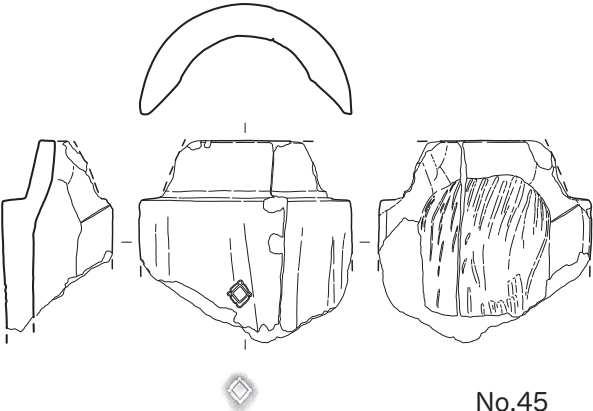
SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第4層から出土した丸瓦である。残存最大長



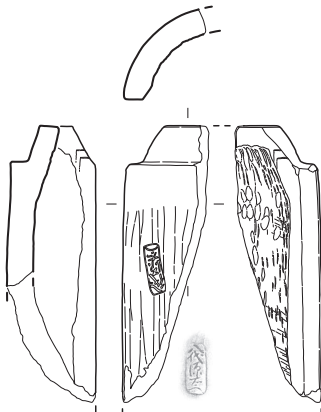
No.43



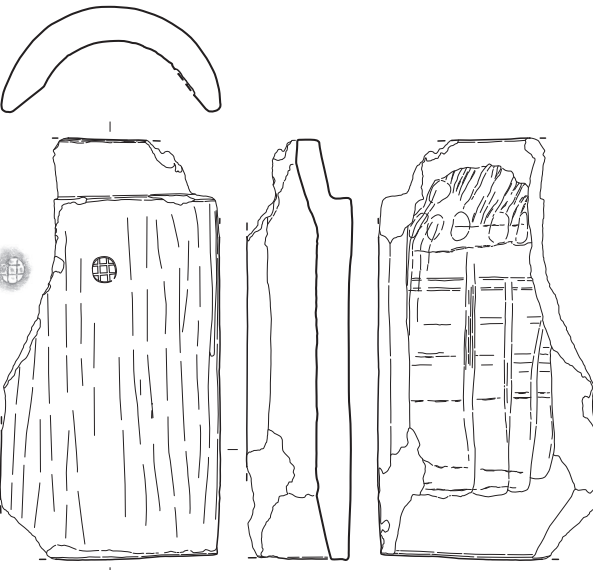
No.44



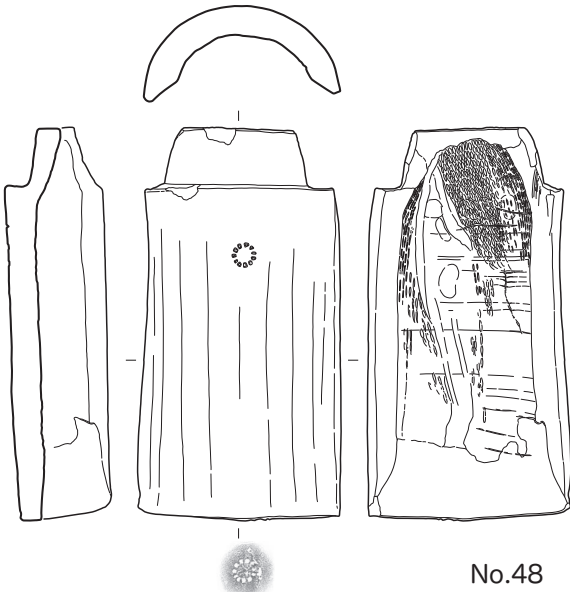
No.45



No.46



No.47



No.48

Fig.37 瓦類実測図①

0 10cm

30.0cm、最大幅 14.8cm、胴部長 26.9cm、胴部径 14.8cm、玉縁長 3.1cm、残存玉縁径 11.0cm、最大厚 1.7cm、谷部 4.7cm を測る。胴部凹面にコビキ B 類と布目痕、ゴザ状圧痕、ナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。胴部凸面に「八代吉平」銘の刻印を有する。

52 巴紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第 3 層から出土した軒丸瓦である。最大長 31.4cm、最大幅 15.8cm、胴部長 27.8cm、胴部径 16.2cm、玉縁長 3.6cm、玉縁径 12.5cm、最大厚 1.8cm、谷部 6.3cm を測る。瓦当部に三巴紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。瓦当部は完形である。胴部凹面にコビキ B 類と布状圧痕、ナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は布及び櫛状工具によるナデ調整が認められる。刻印及び釘穴がみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに暗灰色 (N3/) を呈する。

53 巴紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第 3 層から出土した軒丸瓦である。最大長 31.4cm、残存最大幅 9.5cm、胴部長 27.6cm、残存胴部径 10.0cm、玉縁長 4.5cm、玉縁径 3.8cm、最大厚 2.4cm を測る。瓦当部に三巴紋を配し、周縁に 2 個の珠紋が認められる。胴部凹面にコビキ B 類とゴザ状圧痕、カキヤブリが認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は布及び板状工具によるナデ調整が認められる。釘穴がみられる。胎土は精良、焼成は良好で、色調は凹部、凸部ともに暗灰色 (N3/) を呈する。

54 巴紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第 4 層から出土した軒丸瓦である。最大長 31.4cm、残存最大幅 9.5cm、胴部長 27.6cm、残存胴部径 10.0cm、玉縁長 3.8cm、残存玉縁径 7.2cm、最大厚 2.4cm を測る。瓦当部に三巴紋を配し、周縁に 3 個の珠紋が認められる。胴部凹面にコビキ B 類と布目痕、ゴザ状圧痕が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良軟質で、焼成は不良で、色調は凹部、凸部ともに灰白色 (5Y7/1) を呈する。

55 巴紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第 3 層から出土した巴紋軒丸瓦である。最大長 33.8cm、最大幅 16.7cm、胴部長 29.6cm、胴部径 16.6cm、玉縁長 4.2cm、玉縁径 14.1cm、最大厚 2.5cm、谷部 5.4cm、瓦当部の残存最大高 8.1cm、瓦当部の残存最大幅 16.0cm を測る。瓦当部に巴紋を配する。胴部凹面にコビキ B 類と布目痕、ゴザ状圧痕が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は格子状圧痕とナデ調整が認められる。釘穴及び鉄釘の一部が残存。また、上面

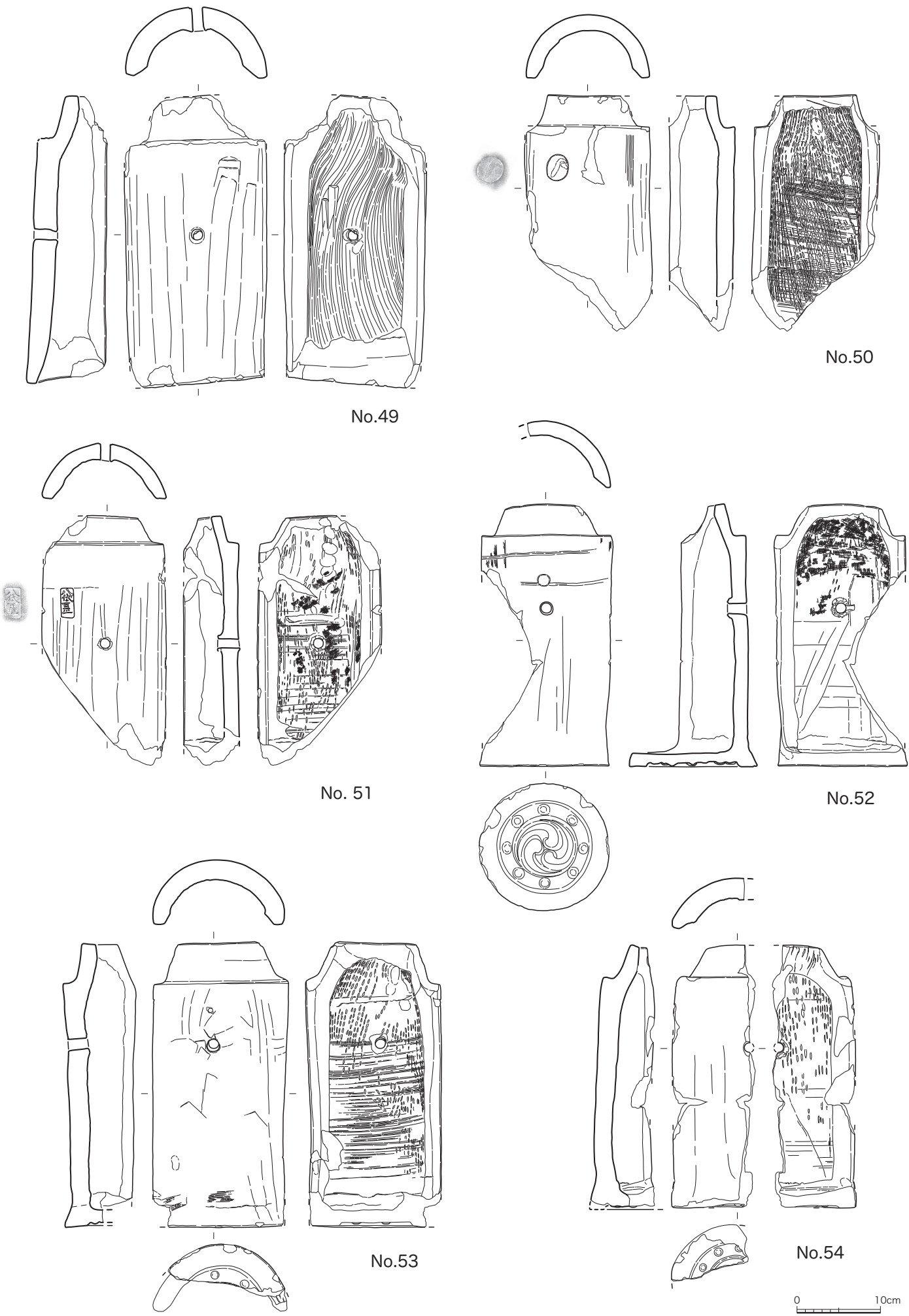


Fig.38 瓦類実測図②

に「○」の刻印が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

56 巴紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第3層から出土した巴紋軒丸瓦である。最大長 4.4cm、最大幅 16.5cm、胴部長 4.4cm、瓦当部の残存最大高 15.6cm、瓦当部の最大幅 16.5cm を測る。瓦当部に三巴紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。胴部凹面に板状工具及び布によるナデ調整が認められ、胴部凸面はナデ調整及びカキヤブリが認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

57 九曜紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 3.9cm、残存最大幅 15.4cm、胴部長 4.4cm、瓦当部の最大高 15.5cm、瓦当部の残存最大幅 15.4cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。中心曜径は 3.8cm、周曜径は 2.3cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。内面はナデ調整が認められる。丸瓦接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに暗灰色 (N3/) を呈する。

58 九曜紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 5.8cm、残存最大幅 15.8cm、瓦当部の最大高 15.4cm、瓦当部の最大幅 15.8cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。中心曜径は 4.1cm、周曜径は 2.3cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面に板状工具によるナデ調整が認められ、胴部凸面はナデ調整が認められる。丸瓦接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰白色 (N4/) を呈する。

59 九曜紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡の第4層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 4.5cm、残存最大幅 14.4cm、瓦当部の残存最大高 15.1cm、瓦当部の残存最大幅 14.4cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。中心曜径は 3.7cm、周曜径は 2.2cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面及び凸面にはナデ調整が認められる。丸瓦接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに黄灰色 (2.5Y6/1) を呈する。

60 九曜紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第3層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 3.8cm、残存最大幅 15.2cm、瓦当部の残存最大高 14.7cm、瓦当部の残存最大幅 15.2cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って 8 個の珠紋が配置されている。中心曜径は 3.7cm、周曜径は 2.2cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面及び凸面にはナデ調整が認められる。丸瓦接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は精良で、焼成も良

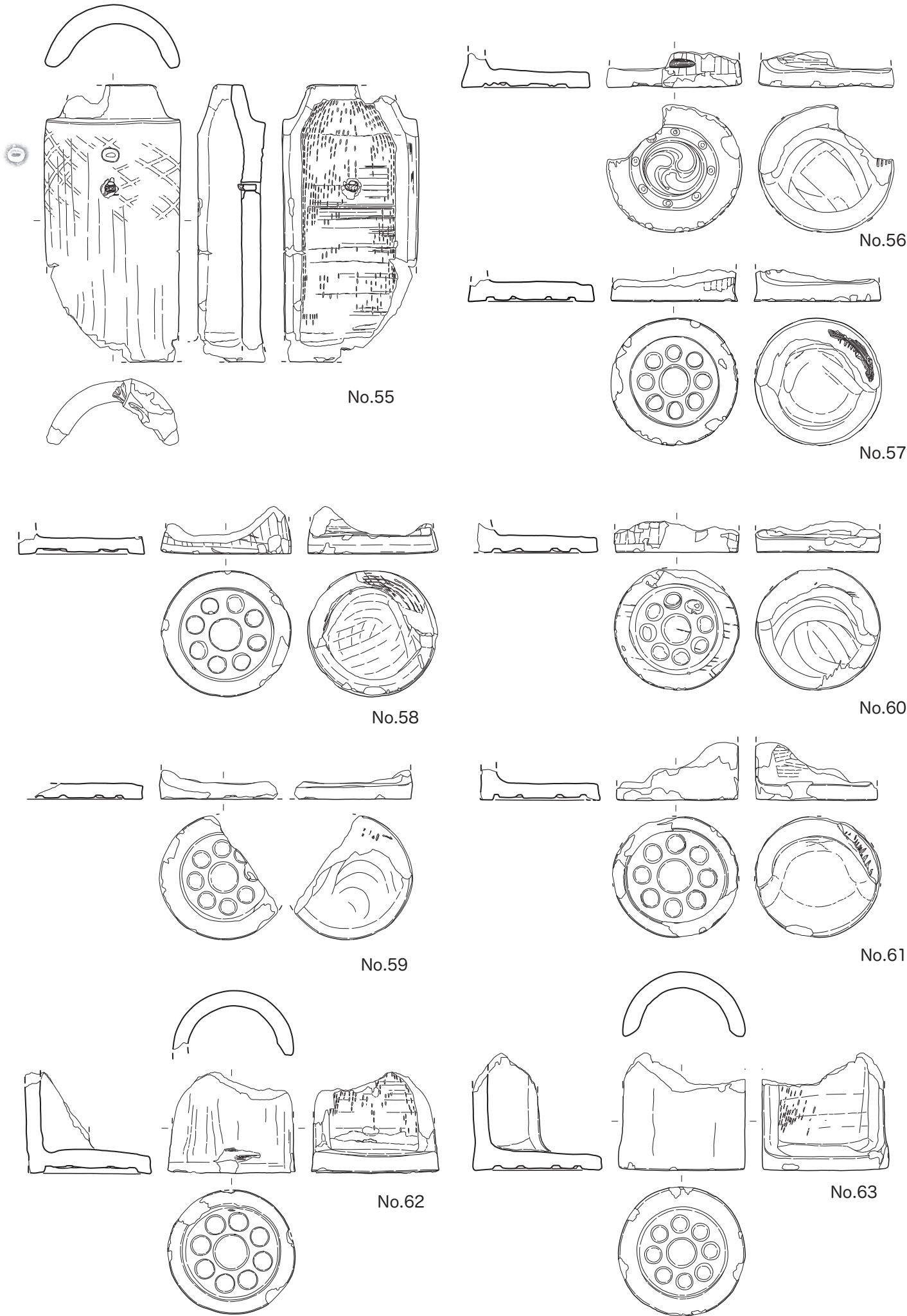


Fig.39 瓦類実測図③

好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N6/) を呈する。

61 九曜紋軒丸瓦

SW03 前面堀跡の第3層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 7.1cm、残存最大幅 14.8cm、残存瓦当部の最大高 14.7cm、瓦当部の残存最大幅 15.3cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って8個の珠紋が配置されている。中心曜径は 4.3cm、周曜径は 2.3cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面及び凸面にはナデ調整が認められる。丸瓦接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は精良だが焼成は不良で、色調は凹部が灰白色 (2.5Y7/1)、凸部が灰黄色 (2.5Y7/2) を呈する。

62 九曜紋軒丸瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第4層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 12.3cm、残存最大幅 15.5cm、残存胴部長 12.3cm、残存胴部径 14.6cm、残存最大厚 1.9cm、残存谷部 6.0cm、瓦当部の残存最大高 15.0cm、瓦当部の残存最大幅 15.5cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って8個の珠紋が配置されている。中心曜径は 4.4cm、周曜径は 2.4cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面にコビキ B 類とゴザ状圧痕、ナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後ナデ調整を施す。胴部凸面は布によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

63 九曜紋軒丸瓦

SW01 の A-4 グリッドの第4層から出土した軒丸瓦である。残存最大長 14.3cm、最大幅 15.4cm、残存胴部長 14.3cm、残存胴部径 14.8cm、残存最大厚 2.0cm、残存谷部 6.0cm、瓦当部の最大高 15.6cm、瓦当部の最大幅 15.4cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って8個の珠紋が配置されている。中心曜径は 3.7cm、周曜径は 2.2cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部凹面にコビキ B 類とゴザ状圧痕、板状工具によるナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後ナデ調整を施す。胴部凸面は板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N5/) を呈する。

64 九曜紋鳥衾

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第3層から出土した鳥衾である。残存最大長 14.4cm、胴部の残存径 11.2cm、瓦当部の残存最大高 17.5cm、瓦当部の最大幅 15.8cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って8個の珠紋が配置されている。中心曜径は 3.8cm、周曜径は 2.4cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部内外面に板状工具及び布によるナデ調整が認められ、胴部内面には指押えの痕がみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は外面が灰色 (N5/)、内面が灰白色 (N7/) を呈する。

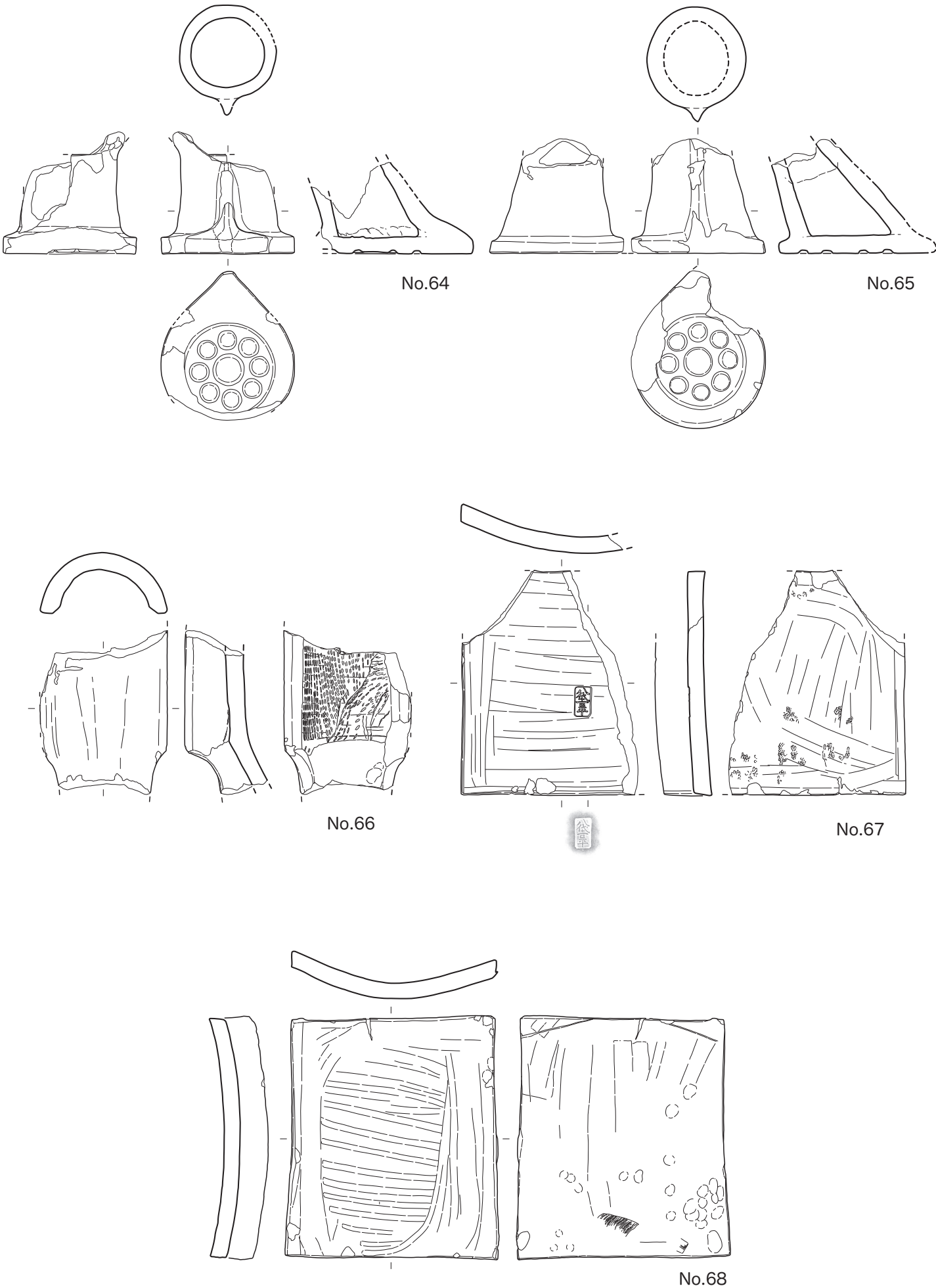


Fig.40 瓦類実測図④

65 九曜紋鳥衾瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第3層から出土した鳥衾である。残存最大長 13.4cm、胴部の残存径 11.8cm、瓦当部の残存最大長 18.0cm、瓦当部の残存最大幅 15.9cm を測る。瓦当部に九曜紋を配し、周縁に沿って8個の珠紋が配置されている。中心曜径が 3.4cm、周曜径は 2.2cm を測る。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。胴部外面に板状工具及び布によるナデ調整、胴部内面にはナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は外面が灰色 (N6/)、内面が灰色 (N4/) を呈する。

66 九曜紋鳥衾瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第3層から出土した鳥衾で、残存最大長 19.4cm、残存最大幅 15.0cm、胴部の残存長 15.0cm、胴部の残存径 14.8cm、残存最大厚 2.1cm、残存谷部 5.2cm を測る。瓦当部は欠損している。胴部凹面にコビキ B 類とゴザ状圧痕、指押後のナデ調整が認められ、側縁の頭から玉縁にかけてカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具のち布によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が灰色 (N4/)、凸部が褐灰色 (10YR4/1) を呈する。

67 平瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第3層から出土した平瓦である。最大長 26.5cm、残存最大幅 20.9cm、最大厚 2.0cm を測る。凹面及び凸面にナデ調整が認められる。凹部に「八代吉平」の刻印がみられる。同一の刻印がある平瓦は、八代市平山新町に所在する松岡屋敷跡からも2点出土している (熊本県教育委員会 1995)。縁部面はカマによる面取り後にナデ調整を施している。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

68 平瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第4層から出土した平瓦である。最大長 28.3cm、最大幅 25.1cm、広端幅 25.2cm、狭端幅 24.1cm、最大厚 2.0cm、谷部 3.2cm を測る。凹面及び凸面にへう状工具によるナデ調整が認められる。縁部面はカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

69 平瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第3層から出土した平瓦である。最大長 30.2cm、最大幅 22.3cm、最大厚 2.2cm を測る。凹面及び凸面にへう状工具によるナデ調整が認められる。胴部凹面に T 字型の刻印がみられる。縁部面はカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胎土は精良で、焼成もへ良好で、色調は凹部が暗灰色 (N3/)、凸部が灰色 (N5/) を呈する。

70 平瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した平瓦である。残存最大長

12.2cm、残存最大幅 11.2cm、残存最大厚 1.9cm を測る。凹面及び凸面に板状工具によるナデ調整が認められる。胴部凹面に「大」の刻印が残されている。縁部面はカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N5/) を呈する。

71 平瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第3層から出土した平瓦である。残存最大長 13.6cm、残存最大幅 10.2cm、残存最大厚 1.9cm を測る。凹面及び凸面にはナデ調整が認められる。胴部凹面に「八代清」の刻印が残されている。縁部面はカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が暗灰色 (N3/)、凸部が灰色 (N4/) を呈する。

72 軒平瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第4層から出土した軒平瓦であるが、中心飾りは欠損しており不明である。最大長 28.9cm、最大幅 26.9cm、最大厚 1.9cm を測る。胴部凹面に板状工具によるナデ調整が認められ、縁部面はカマ切りによる面取り後にナデ調整を施している。胴部凸面は板状工具のち布によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N5/) を呈する。

73 九曜紋軒平瓦

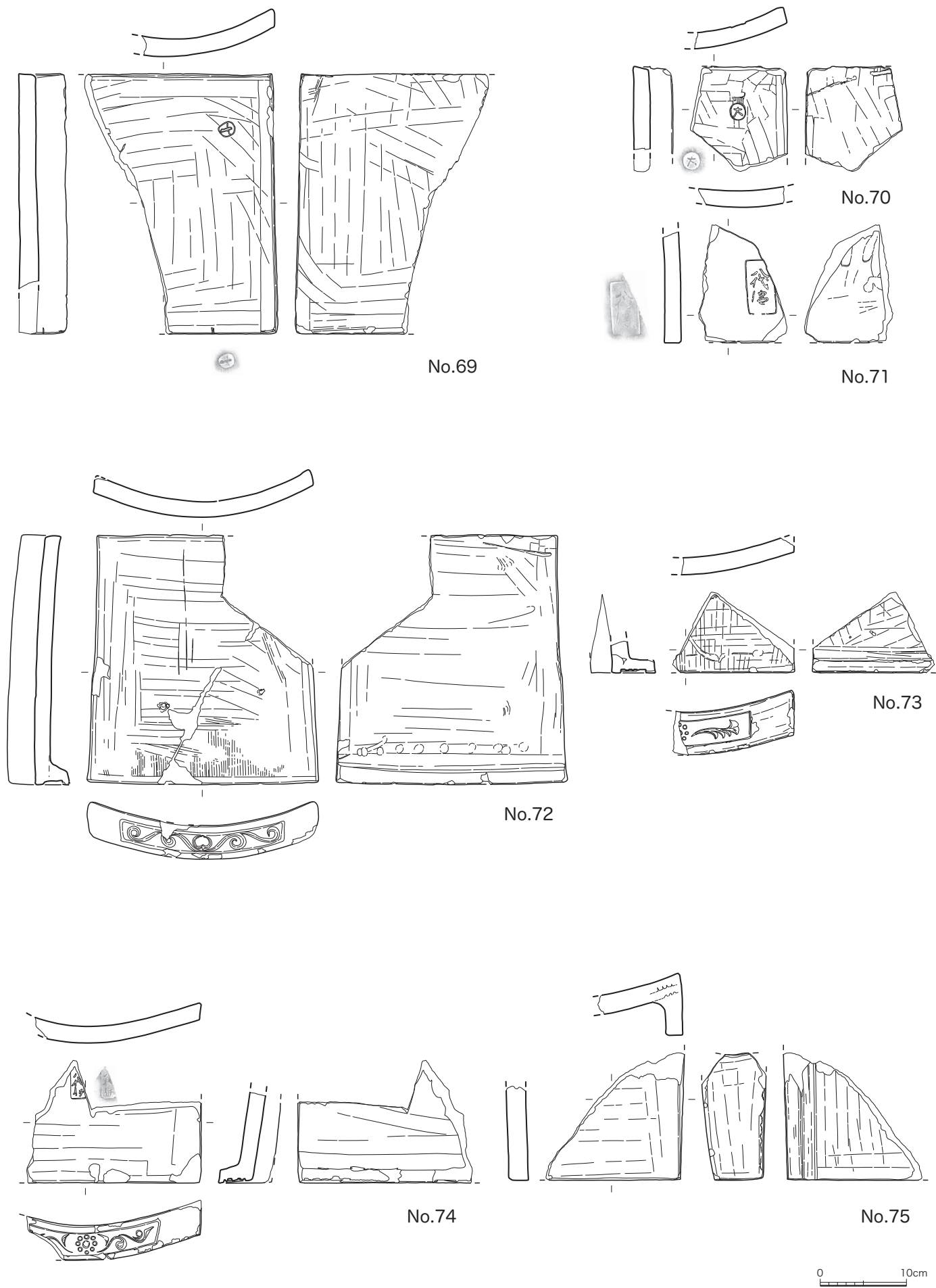
SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第3層から出土した九曜紋軒平瓦である。残存最大長 9.4cm、残存最大幅 14.1cm、最大厚 2.0cm、瓦当部の残存最大高 7.5cm、瓦当部の残存最大幅 14.1cm を測る。瓦当部の紋様のうち、中心飾りは九曜紋であり、周囲は銀杏紋と推測されるも不明である。九曜紋の中心の星の復元径は 0.6cm、周辺の星の径は 0.4cm を測り、星4個が欠損している。凹面及び凸面に板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰白色 (N7/) を呈する。

74 九曜紋軒平瓦

SW01(前面堀跡 A-7・9 グリッド) の第4層から出土した九曜紋軒平瓦である。残存最大長 14.2cm、残存最大幅 20.2cm、残存最大厚 1.9cm、残存谷部 4.6cm、瓦当部の残存最大高 7.0cm、瓦当部の残存最大幅 20.2cm を測る。瓦当部中央に九曜紋、左右に唐草紋を配する。九曜紋の中心の星の径は 0.9cm、周辺の星の径は 0.6cm を測る。胴部凹面に「八代伊」の刻印が残されている。凹面及び凸面に板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N5/) を呈する。

75 袖瓦

SW01 前面堀跡 (A-8 グリッド) の第4層から出土した袖瓦(右)である。最大長 14.8cm、最大幅 16.0cm、最大厚 2.2cm、袖部の残存最大長 7.3cm、袖部の残存最大奥行 14.1cm を測る。凹面及び凸面に板状工具によるナデ調整が認められる。接合部にカキヤブリがみられる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部が灰色 (N4/)、凸部が灰色 (N5/) を呈する。



76 唐草紋万十軒瓦

SW01 前面堀跡の第3層から出土した万十軒瓦(右)と思われる。残存最大長 17.3cm、残存最大幅 12.6cm、残存最大厚 2.0cm、瓦当部の残存最大高 9.4cm、瓦当部の残存最大幅 12.7cm を測る。軒丸部の紋様は九曜紋で、中心の星の径は 2.0cm、周辺の星の径は 0.8cm を測る。軒平部の瓦当の紋様は唐草紋である。凹面にナデ調整、凸面には板状工具によるナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

77 九曜紋鬼瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第4層から出土した鬼瓦である。最大長 18.3cm、最大幅 12.5cm、最大厚 1.9cm を測る。瓦中央には九曜紋が記されている。九曜紋の中心の星の径は 5.9cm で、周辺の星の径は 2.9cm を測る。外面にナデ調整、内面にヘラ状工具によるナデ調整が認められる。接合部にはカキヤブリがみられる。胎土は精良だが焼成は不良で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

78 九曜紋鬼瓦

SW01 前面堀跡 (A-7 グリッド) の第4層から出土した鬼瓦である。最大長 14.8cm、最大幅 13.6cm、最大厚 2.4cm を測る。瓦中央には九曜紋が記されている。凹面に板状工具によるナデ調整、凸面にナデ調整が認められる。胎土は精良だが焼成は不良で、色調は凹部、凸部ともに灰色 (N4/) を呈する。

79 九曜紋鬼瓦

SW01 前面堀跡 (A-9 グリッド) の第3層から出土した完形の鬼瓦である。最大長 26.1cm、最大幅 33.0cm、最大厚 2.6cm を測る。瓦中央には九曜紋が記されている。九曜紋の中心の星を含めた4個が残存している。九曜紋及び取手部分は本体に貼り付けている。九曜紋の中心の星の径は 4.5cm、周辺の星の径は 3.0cm を測る。内面にナデ調整が認められる。胎土は精良だが焼成は不良で、色調は凹部、凸部ともに灰白色 (N7/) を呈する。

80 九曜紋鬼瓦

SW01 前面堀跡の第3層から出土した鬼瓦である。最大長 29.9cm、残存最大幅 23.4cm、最大厚 2.1cm を測る。瓦中央には九曜紋が記されている。九曜紋部分は本体に貼り付けている。九曜紋の中心の星の径は 4.4cm、周辺の星の径は 3.3cm を測る。内面(取手部分を含む)にナデ調整が認められる。胎土は精良で、焼成も良好で、色調は凹部、凸部ともに灰白色 (N4/) を呈する。

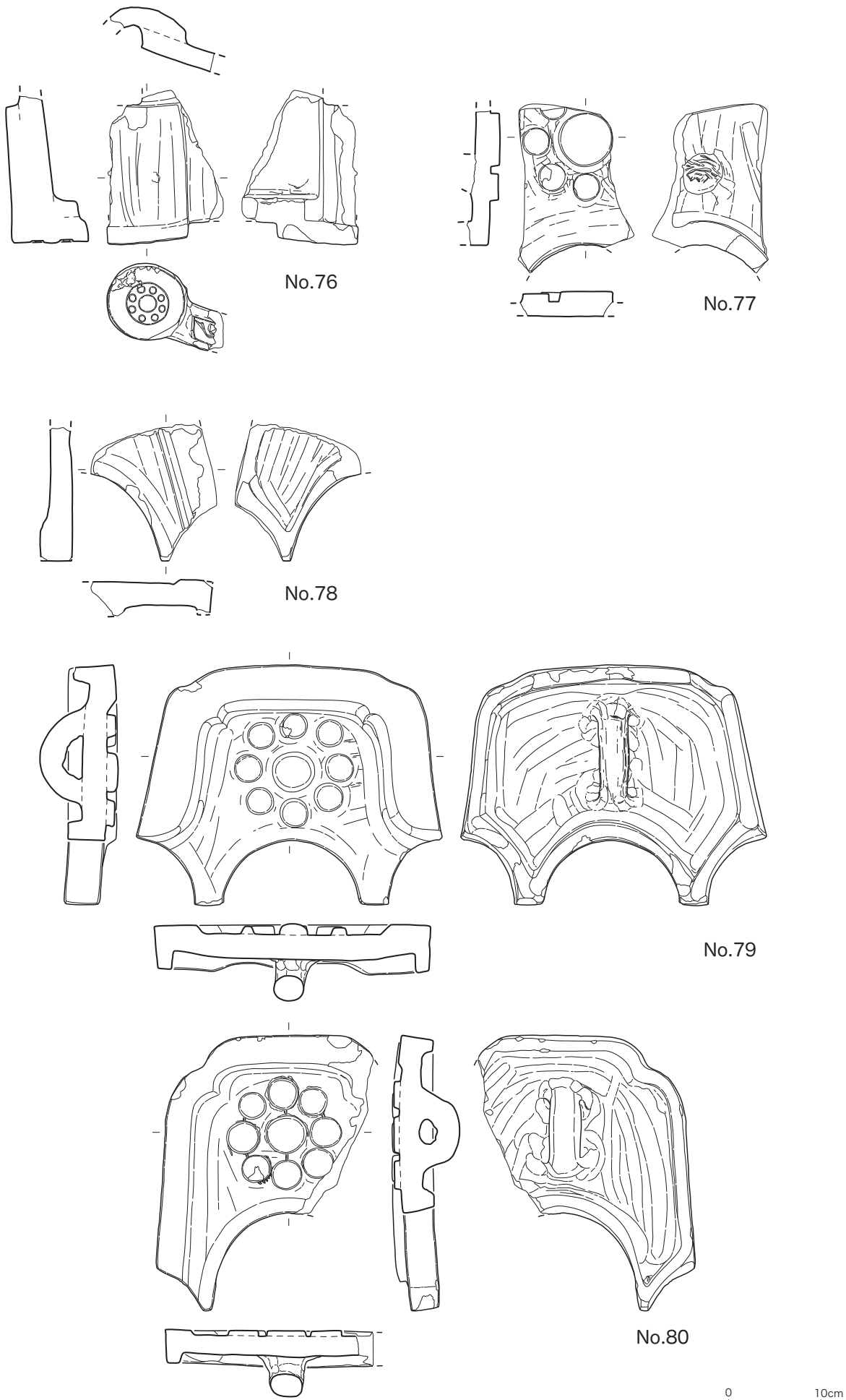


Fig.42 瓦類実測図⑥